第一編に於て、著者はあまりにも、巴里の歓楽郷方面の事許り書き立てた様だ。だから早合點の讀者は、巴里て所は一から十までドンチヤン騒ぎの近代バビロンだと、一圖に思ひ込んで仕舞ふかも知れない。然し編には二面がある通り、如何にも一ツの面は、ドンチヤン騒ぎの近代バビロンに間違ひないが、今一ツの面は、案外勤勉努力、創意に富んだ、巴里人の健全なる近代生活が躍動して居るのだ。

觀察が一方に偏すると云ふ事は、其の物の本質を掴む爲に、最も間違を惹起しやすい缺點である。著者は、「物は兩面から見よ」主義である。從つて當然、巴里と云ふ楯の明い半面である、「巴里の眞相」を第二編として附加へたのである。此の編の筆者ジエー・エツツケ氏の所說は、多少國粹的所論が無いでもないが、旅獨人種として世界から謬解されて居る、巴里中產階級以下の人々の健實な獨創的な、つゝましい生活が、大變によく紹介されて居る。巴里をフランス人同樣に熱愛する吾々は、巴里及巴里人に敬意を表する爲に丈でも、多少は堅い文章であるけれども、此「巴里の眞相」と題する一章を熱讀玩味する必要はあるだらうと、思ふものである。

（1）

或る經育兒が、數ヶ月前から僕に次の樣な皮肉を云つた。

「巴里ではもう遊蕩氣分は味はへない。……己れは今度はベルリンへ行く。あすこへ行けば、己れの望みのものが容易に發見（みつか）るからネ。」

彼ヤンキーの放蕩兒は、その本國ニュー・ヨークで味はつてゐた、第六感を極度に刺戟させると云つたやうな遊蕩氣分に浸ることを、この巴里に豫期してゐたのだ。が、案外巴里は、彼にとつて開放的なものではなかつたのである。

誰が何と云つても、わが巴里では、他の都市に見受ける、恰も癩病やみ然たる淫賣婦の横行跋扈は見られない。

巴里に於ては、公德上の見地から、街々の巡査によつてこれは或る程度まで嚴重に取締られてゐる。

巴里を汚物そのものだなどと貶さうとする輩は、その議論の材料を、輸入新聞雜誌だとか、或は或る特別な文學だとかの中から拾ひ出して來る。

成程、それらの新聞雜誌は、遊蕩そのものを暴露し、健全な精神の所有者を誘惑しようとするものであるかも知れない。だから、冷靜な常識人たる一部の佛蘭人からは、これらは甚だしく忌み嫌はれてゐるのだ。

又、文學、所謂現實主義（レアリスム）の文學に就いて云つても、それは少くとも必然性を有する。それは、實に研究と反省熟慮との餘になつたものであり、從つてそれは完全なもので何等悖德的なものではないと思ふ。

すべて人間の心の中には、人間としての魂、卽ち人間性が存在してゐると同時に、心靈論で云ふ所の飛躍の原因となるべき野獸性が存在してゐると云ふのは確だ。

その飛躍を實際に於いて分析し研究せねばならない。それには、心理小說などでは未だ充分だとは云へないのである。

フロイドはこれを「狂氣（ユニフック）」と呼んでゐる。彼の學說の價値を否定することは不可能だらう。

華やかな小說を唯我慢出來るものだ位に思つてゐる人々は、その現實の缺陷を蔽はんとするものであり、又それによつて風俗の紊亂を助長するものに他ならない。

以上のやうな見地から、巴里が必然的に赴くところは、卽ちわれ〳〵が前に述べ來つたところのものとなるのである。

今、その具體的な例をとつて見よう。

同性愛（ホモセクシュアリテ）と云ふものが、巴里以外の世界の他の首都に屢々見受けられないと云ふことは果して云ひ得るだらうか。

かうした性的感情の轉倒と云ふやうな矛盾は、諸外國には屢々見受けられるに反して、わが巴里にはその實例が甚だ尠いのである。

それらは、一概に氣質に基く問題だとは云へない。これは實に好奇心のあるわざであり、病的精神の所產に他ならない。

かやうに觀察して行くならば、何處に巴里の非難さるべきところがあるだらうか。假令、淫賣屋が町に澤山あつたとしても……。

勿論、淫賣屋の數は非常に多いかも知れない。しかし、それらは秘密のヴェールに隱されてゐるし、警察の方でも嚴重に取締つてゐるのだ。が、何と云つても、これが病的害毒を蔓延させたことは事實だ。

かの歐洲大戰の際、アメリカ軍隊の到來は、如何に醫者達をテン手古舞させたか。醫者が若し、その職業的秘密を洩らして憚らないとしたら、彼等は諸君に、これらアメリカの兵士たちが、如何に多くの巴里の淫賣婦と遊び戯れて、その結果病毒に感染したかを物語るだらう。醫者連中は、口を醋くして兵士達に忠告したのであつたが……。

大戰の混亂最中に拘らず、彼女等淫賣婦達は、他のすべてのところ同樣に、抑壓されてもこれを阻むことが出來なかつた。そして彼女等は、そこで確實な儲け仕事を絕えずやつてゐたのである。

人間の心中には、恥しいことを寧ろ狂喜する一種悖德的な傾向が有する。それが裸體美人の大披露を促す原因となつたのだ。

そこを狙つて、劇場（テアートル）や寄席（ミュージック・ホール）の座元達は、大膽にも裸體美人を舞臺で踊らせたのである。愛を金錢の道具としたり、又其他の物質的の必然の結果は、屢々馬鹿げたことを助長させるものだ。かくて、これらの傾向は急速に普及蔓延するに至つたのである。

―、結局、巴里にはこれらの不行跡の蔓延の他に果して何が存在するのか……と問ふ人もあるかも知らない。

しかし、僕はかう云ふ非難を加へる人達に向つて、高らかに答へたい。

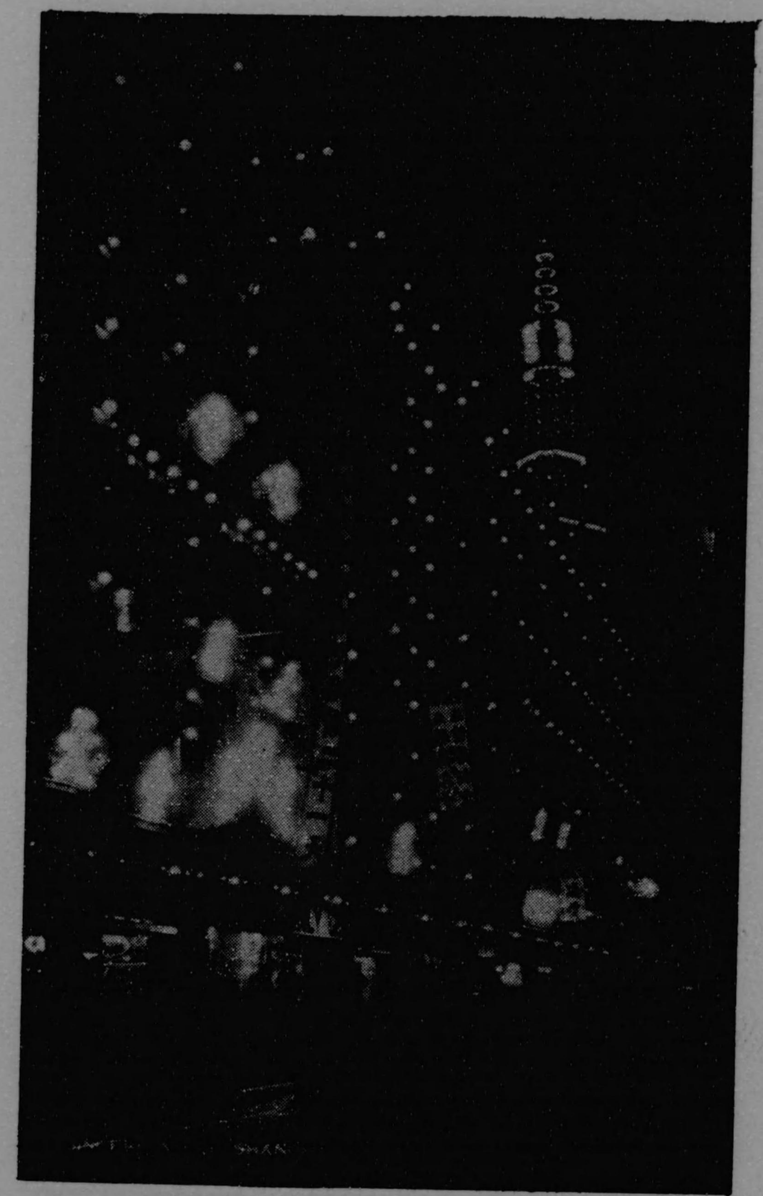
「汝等のうち罪なきもの、先づこの女性（巴里）を打て……」と。

實際、締切つた家の內部でも見られないやうな種々の愉快が、ブウローニュの森の夜の散策では見物出來る。

が、それらの入交つた人々は、すべて皆巴里の人であり、佛蘭西人であるとの確證が果して得られるだらうか。恐らく、これらの人々の全部が佛蘭西人だとは云ひ得ないのだ。

況んや、この森は、少くとも僕の知る限りの國々では見られぬ程、警官の巡回が頻繁である。如何

上流野蛮モダン美人



南京路先施公司の夜景

にこの森が人々に誤り傳へられてゐるかは、この一事のみでも分らう。

これらの大袈裟な誤傳は、結局、佛蘭西人の性質そのものから由來したのだらう。佛蘭西人は、一體に饒舌家である。彼は何事か一事を知るや否や、あることないこと、恰で家の屋根の上の上まで聞えるやうに絶叫してしまふ癖があるのだ。

又、一時、巴里の婦人間にサフィズムが漸次流行し出したと傳へられたことがある。が、これは必ずしも巴里のみに見受ける現象ではないのだ。これは、大戰の結果、大多數の男子を失ひ、必然的に又多數の夫を失つた國々の殆ど全ての女性間に行はれた現象だつた。

これらの傾向の激しい獨逸などから見ると、佛蘭西は寧ろ云ふに足りないのだ。

又、數年前から、何でも外人が云ひふらしたのださうだが、こんなことが平氣で信じられてゐる。「巴里の女は實にあしらひ易い。相當な金さへ彼女の前に並べれば、たちどころに君の意に從ふだらう。」と。

そして、巴里の非難者達は、事實一部の商賣女のみに經驗して來たところのものを盛んに開陳に及

ふのだ。

巴里最氣の僕は、一つの例をもつてこれを反駁する。

或る時バルカンの某國國王が、巴里を見物に來た。王は偶々ある裁縫店の扉から今し出て來た幾人かの裁縫女をチラリと瞥見に及んだが、その中の一人に殊更眼を惹かれた。好色な王は、早速傍らの侍從長を遣して、彼女に交渉させて見た。……

女は侍從長が傳へた王の要求と云ふのを默つて聽いて居たが、聽き終るや王の顏をしげしげ凝視めてから、とてもふるつた返答をしたのである。

「厭です！　あんなチンチクリンなんか！」と。實際王樣の顏は見れば見るほど變挺だつた。

これで見ても分るとほり、莫大な金が轉ろけ込んで來ることや、あはよくばお后にもなり得ると云ふ幸運も、娘を誘惑するには足りなかつたのだ。唯相手となるべき王樣の顏が多少妙竹林に出來上つてゐたと云ふ單純な理由から彼女はその要求を峻拒したに過ぎない。

これは明らかに、彼女が美に對する藝術的感覺を有してゐたことを物語るもので、金錢の奴隷たることに甘んじない巴里女（パリジエンヌ）氣質の一端を示してゐる。

獨逸こそ、見識の猫を被つた獨逸の女こそ、われ〳〵が屢々他國で見受けるやうに、家庭の女としてだけでは滿足が出來ないのである。

歐洲大戰中、獨逸人の俘虜の所へ送つて來たその妻の手紙の內容は、皆彼女等の現在の財產上の苦しみを、くど〳〵と書き立てゝあつて、その不義な生活の裏面をほかしてあつたさうだ。

（2）

モンパルナスに眼を投じて見給へ！

其處には、繪畫と美術との研究に耽る如何に多くの世界の國々の代表者が蟻集してゐる事か……。

モンマルトルやビュットは其等の藝術家達を結局見離してしまひ、益々兩性の亂舞場と化し、放埒な遊蕩場となつてしまつた。

然し、モンパルナスは依然としてモンパルナスで、其處は、藝術の完成と會得とに努力する若き人々により占領されてゐるのだ。

現實主義の藝術的傾向を非難する人々は多い樣だ。然し、其等の批評家の大部分はそれの眞實の姿を見ぬ人達であらう。

吾々は明かに今、復興の時代にあるのだ。佛蘭西の精華は大戰前までは、其生活の平穩の爲めに、至極無味乾燥のものであつた。

大戰後の新時代に至つては、我國人は自然そのものから漸次離れて、しやれを追ひ優柔に走るものと云はれた。

かくて、新時代は若々しい粗豪さを以て實現し、純眞な現實主義は大膽にして赤裸々な作品を生み出すに至つた。

此目的を達せんが爲めに、新時代の流れは、今までの古き殘骸を地上に投棄てゝ、新鮮溢れる殿堂を作り初めたのである。

この立體派畫家の試み、――卽ち純白の上にどす黑い黑色をば染めんとする試みは、一方に暗黑的な影と他方に目を眩ます如き光明とを生ぜしめる結果となつた。

この二つの技術は、外國人の注目を引かずにはゐなかつた。

此立體派主義は言ふまでもなく、其起源はスラヴ民族より起つてゐる。それは明瞭に其民族の精神狀態を現はし、凡て光明と、急速な閃きによりて作られたものである。

以上の如き一つの要素が巴里と云ふ一つの坩堝（ルツボ）の中に混交せられ、藝術的な眞實の直感により、平

衡を保たれかくて茲に一つの綜合せられた藝術が生れたのである。

此坩堝こそ巴里であり、モンパルナスであつて、多數の若き藝術家が熱心に理想の眼を開きつゝ、蟻集して、研究に怠りない所なのだ。

其處は、遙か彼方のアメリカより極東の日本に至るまで凡ての國々の藝術家達が集つてくる所なのだ。

然して、彼等は研鑽の功なるや、此偉大なる仕事を身につけて、恰も、青年はそれ自身、本質的に模倣者であると共に又同化者である如く、彼等は此モンパルナスを去つて行く。

であるから、徒らに時勢を追ふ輕佻浮薄な連中の判斷は、何等基礎を置く可きものはない。之等の馬鹿らしき事は、唯、瞬間的な時代を追ふ人々にのみ屬しておるものである。實際、此等巴里に對する惡評は、金錢のためにのみ作られた想像と、詐欺的の藝術のみしか知らぬ印象派の人達によりなされたのであらうと吾人は想像す。

試みに、モンパルナスの夜を散歩して見給へ、熱烈な若き人達によつて群り占領された居酒屋の光景は、唯今まで何んの苦もなく萬事了解し得るものと思つてゐた勇敢な有產階級の人々にとつては、それは啓發すべき有益な殿堂であらう。

彼等達は如何に其等の若き人々が、激烈に一歩も自己の所信を曲げず、談論風發してその止る所なき光景を見るであらう。それらの議論の中には、實に一世を搖かすべき生氣と光明の迸るものもあるのだ。

其他に、此等の居酒屋は小展覽會を形作り、又實際に此等の天才を勇氣付けておる。

是等の外に、尙又、我友人達の風變りさ、奇妙な慣習及びその大膽さを見受くる。

我々は彼等の眞の赤裸々の姿を知り得ると共に、又それを我々の中に取入れる事も出來るのだ。東洋人、或は半東洋人は我々に珍稀な趣味を齎らしてくれる。我々はそれ等を得て巧に融合し得るのだ。それは實に嚴肅な領域であり、到底、モンマルトルやマドレーヌの附近に於て見られる、利益の誘惑でない。

同樣に、婦人達は彼女達同志で自然のまゝの狀態で生活しておる。であるから、巴里が古のバビロ

ンの如く淫蕩な都市であるなどゝ強く非難されるべき理由はない。

唯、今まで歡樂鄕のみを漁つてゐた多數の外人達が巴里に來ても、彼等の國で味つた所のものを、依然遂行しようと試みるから巴里はかくの如き惡評を得るのである。

又、何處の國に行つたとて、專業的淫賣婦の他に、婦人達の中には寂しい彼女の孤獨から逃れて、多少とも金のある男の腕に抱かれたいと欲する者はあるものである。

實際は彼女の體を賣らないとしても、彼女を愛して與れる男の傍にゐて、金錢上の助力を仰ぐ事を望む女は何處の國にでもある。

確かに彼女は屢々夫を變へる。併しそれは決して彼女自身がしたのでなくて彼女の夫が彼女にそうさせたのである。男は女を易々と得たと同じ樣に、易々と彼女を棄てゝしまふからである。

これと同樣な事がやがて遽ぺんとするカルティエ・ラタンにも現はれてゐる。

此の大きな町は、又モンパルナスに於ける如く人を感動させるやうな事件が、屢々、起る所である。

それは、有名な女優と、金持のアメリカ娘とが姉妹の樣に親しいなどゝ、美術家に發かれると直ぐに大評判になつてしまふ。又、繪具板商の小僧が突然に來た伯爵の恩顧を受けて、直ちに親方となつてしまつたとかいやはや實にたわいないものだが、この樣に肉と美との間から如何に多くの評判噂が生れたであらう。

然し、こんな人爲的なつまらぬ噂はそんなに永く續くものでない、やがてぢきに人の頭から忘れられてしまふ。

が、其處の人達はこんな噂をしながらも、獨り眞面目になつて、美に對する眞劍な心を助長しつゝ勤勞に暇ないのだ。

其處は、依然、理想の發現する殿堂である。外國人の貴い典型、すばらしい綴錦、奇妙な擧動ぶり凡てが現實の愉快ならざるものはない。

この新時代こそ又徐々に改革に向ふべき一つの源泉であると言ひ得る。佛蘭西はこの改革により凡ての國民の精華を取入れたのであつた。

之を繪畫に就いて云ふならば、浮彫術とか、燐畫術等を見る事が出來る。かくて、獨逸、オーストリヤに比して遲れざるものとなつたのである。

我佛蘭西が、戰後の若き國であるために、近代的にして實行的な種々のものを取入れるに便であつた。かくて我國民精神は新しき一生產を作り、將來に於ける興味と、美の成因とを豫測するに至らしめた。

かく觀察し來つて、吾々は再び又前に戻つて絕叫してみたい。

若し、巴里が、假令その富める外國の顧客を失つたとて、步道、曖昧宿、ビヤホールを漁つて步く諸國の漫樂者により消費された澤山の金よりも、もつと貴い價値あるものを得るであらう……又實際にそれ等を得たのである。實に巴里の公德がそれ等を得せしめ、國民の健全がそれ等を發達せしめたのである。巴里產の家具家財に於ける新しい藝術、及び室內の裝飾——之等は或は萬人に歡樂の氣分を與へ得ないかも知れない。

然し、藝術的見地より見たる魅力だけは所有しておると云ふ事は何人も否認し得ない。

又、此急激な變化は巴里の精華より湧出したる若々しさの躍動によるものである事は誰も認めるだらう。

かくて巴里は此等の生產の選ばれた中心地となつた。又これからも永久にその中心となるであらう。如何なる外國にあつても、巴里產の平凡な木造製品に比較出來る樣な優雅さ、輕快さを持つものはないであらう。

凡てのものは外國人を色々の姿の下に、手を換へ品を換へて誘惑した。然し我巴里だけは最後に得た自然のまゝの姿で、少しも飾る事なく調和と優美とを以て外人に接した。

又、吾人は前に立體派はスラヴ民族から其源を發しておると述べた。併し、我巴里に於ては、其內面的の裝飾に於て露西亞人も到底窺ひ得ない快適さをば產出したのである。

かくて外國人も我等のモデルを倣ねる樣になつた。其等の初めの理想が彼等の國々から發しておると云ふ事も知らずして……。

以上が下等の居酒屋、淫賣家、競馬場ならざる巴里の眞の姿である。

巴里こそは眞に藝術家の魂に魅力を與へ、優雅と、美と、平衡とを與える所のものである。

（3）

我々は前節に於て家具家財の事を述べた。併してサン・アントワンヌの町及び其附近こそは昔の通り、依然としてそれの名譽を失はないでゐる。

此町は外國人の蝟集する所で又屢々蓄積を著た人達や、怒鳴り騒ぐ人達が澤山ゐるが、彼等は皆殆んど常に働いてゐる。

昔ては、ここに、オーストリヤ人特にハンガリヤ人が多數ゐたが、今では伊太利的要素が多分に占めてゐる。

ロケット街と、ヴォルテール大通り及びサン・アントワンヌの町で作られた大三角形の區劃内には、不幸な樣子をした澤山の人達が住居してゐて、働いてゐる。

特に、ここで我々が、「不幸な樣子」と云つた譯は、給料は騰らぬし、殆んど年中家族の人達は働かねばならぬからである。又、其家屋も非常に古びてゐて、此狹い小區劃内に何人と數知れぬ人達が住

んでゐる。

然し乍ら、金曜日に此處へ來て見給へ。其日の乾物屋、肉屋等の店先の商品陳列が如何に多くあるか、それを見たら、此區劃の人々が不幸であるなどとは一寸考へられぬ。

然し、家具工業の傑作品が丹誠こめて作られる所は、實にこの薄暗い片隅である。

シュマン・ベール通り或はシャローヌ通り其他には、それの多少廣い仕事場が見受けられる。

家々は非常に混雜して建てられてゐるから、其等の中には屢々多少とも注意を引く樣な仕事場を見受ける事が出來る。

實際、それ等のどの家具も、如何に澤山な熟練職工により念入りに拵へられ樣とも、依然として其價格は廉價なものである。

又、その仕事にした所で、容易に人の近寄れない裏庭の奥の方でなされるから、通りしなに、凡てを見極める事は困難である。

此古びた灰色の玄關の後には人間の眞の棲家が潛在してゐるのだ。そして其棲家より巴里の精華は湧出し世界の東西南北に流れ出ずるのである。

此區劃内の外人達は夫々國民性の特色を多分に有してゐる。獨逸人はその忍耐と執拗さと有し、伊太利人は藝術的仕事に對する輕妙な腕を持ち、ポーランド人はその敏捷な精神を有して居る。

然し、此等の各國人は其國元にあるとすれば、不完全な作品のみを作らねばならない。

總體的の完全な美は巴里に於てのみ見出し得るのである。何故と云ふに、精神の均衡と、趣味に對する先天的感覺及び美は絶體的に必要であるからだ。

又、それは丁度大きな商品博覽會の如きもので、人は唯作られた傑作品のみを眺め、それを作り出すまでには、如何に多くの人手がかかつたかを見ない。

實際、其家具は極く稀にしかない樣な工場で製作されるが、其價は極めて安い。然し、巴里の眞の保護者は仕事の種類などをば念頭におかず、唯丹精をこめた商品をば顧客に與へる事のみを計り且其仕事を徐々に改良を加へて行つた。

此區域には最早惡德を求めて歩く人も見當らない、又其處に住んでゐる人達は、惡德を愛撫すべき

時間をも有してゐない。

成程、其處には、喧嘩爭論は起る。併しそれは民族爭鬪に於ても見られる事であるし、況んや個人が嫉妬的感情の持主である以上、尙更の事である。

又、其處では、無數の乞食や、怠け者や、養老院に行く事を欲せぬ老人達もゐる。

ロケットの街は第二帝政時代の如き昔の有樣は存してゐない。唯顧客に商品を賣る繁華な商店街となつてしまつた。

革命のある毎に、此町は少しづつ擴つて、其度毎に極く僅少ではあるが人々の蝟集するのを見た。

又、外國人の勞働家族も彼等が身を落付き得るに至るや、國元に殘してある親戚などを呼び寄せ、かくて今や、それが大集團となり、遂には、職のない人々の多數を形成するに至つた。

其等の人達は勢ひ居酒屋などに行き、職にありつけない痛ましい惱みを紛らすのである。

實際、逞しい腕にとつても、又しつかりした勇氣の爲めにも仕事を與えると云ふ事は絕體に必要な事だ！

かくて、職にありつけなく、空しく殘つた人達は其町の犧牲となり、いまはしき人となつて行つた事は止むを得ない。

佛蘭西の勞働者に關しても、彼等は正に紳士であるべきである。其妻は九十九パーセントまでは家計を正確に、嚴重に切り盛りする謹直な女性である。夫は常に仕事用のシャツを持つてゐるし、其着物は何時もキチンとしてゐる。彼はポケットに酒や煙草を買ふ可き金錢を持つてはいるが、彼の大多數の給料は、多く家計に使用されてしまふ。

所が、夫に伴はれて來た外國の女は、決してこの樣でない。彼女達は此町を不潔にする樣な原因を屢々作る。

獨身の男達が澤山、バスチィユに行つて、其處の娼賣婦を漁る事は事實である。

彼女達は多く情夫を持つてゐて、若し情夫が浮浪罪か何かの嫌疑で拘留されると、女は最早醜業をしないで眞目面に働らくと云ふ事である。即ち云はば、情夫の爲めに醜業をする事になる。

ある勞働者——彼は或る工場の職工長であると自稱してゐるのであるが——の斷言によれば……

「俺の妻の一日の稼ぎ高は俺の稼ぎ高よりも、ずつと多い」と忌忌し相に言つてゐる。

これは勿論大都會が生んだ悲劇であらうが、面白い事には、娼賣婦達は彼女の情夫が自分達より稼ぎ高が少くとも、其男から離れずにあくまで一緒にゐる事だ。

併し、巴里は至る所變つた。そして一歩一歩改革に進みつつある。

若し、夕方バスチィユを散歩する人があるならば、此等の娼賣婦の通行人を呼び掛けるを見るかもしれない。然し、此事は徐々に減少して行くと云ふ事を確認されるであらう。娼賣婦達自身も亦、そうした事をするのは社界に害毒を流し、非常に悪い事だと考へる者が多い。

唯、家計の不如意が彼女達を夜分に、歩道などに誘はしたので、どうもこれは致し方がない譯である。然し、これ等の事も其習慣性を失ひつつある事は事實だ。であるから、今や娼賣をやる女も獨身女に限り、それも彼女の金が殆んど無一文となつてしまつた微な場合で、急速に金が懐中に入れば、彼女の道德觀念が自ら勃然と湧き出ずるのである。

之と反對に、勞働者の細君は非常に眞面目なのである。金錢づくの誘惑でなく、唯一時の煩悩にかられて之を行ふのである。

以上で言ひ盡したつもりである。唯巴里に對するくだらぬ惡口屋が多いので困る。彼等の言に從へば巴里は丸で大きな一つの娼賣家になつてしまふだらう。

さて、それからナーション廣場のあるサン・アントワンヌ町に行く事にしよう。そこの「第十二世」には小產階級、小雇員階級の人々が住んでおり、「第二十二世」の傍はあらゆる種類の勞働者達の住んでゐる所である。

以上の所は特別に之と言つて、書く事はない樣である。

其代りに、此町はバスチィユの廣場を横ぎつて遠く反對の方向まで延びてゐる。此處こそ、歐洲、アジヤ及びアフリカの各地から移住して來た、エスラエル人達の集合して居る所だ。

此町に沿つて、サンポールに近づくまで、其處の居酒屋などで澤山にエスラエル人が蝟集しておるのを見受ける。又其等の人達は皆相當な身裝をして居るから、穢いと云ふ感じは起らない。

風異りな珍らしい愛を望むとすれば、此溜り場に行けばよい。數枚の青い札で、心ゆくまで充分な

滿足を味はひ得る事は必條だ。

又、此處では危險な事も極く少くない。勿論中には巡査の眼をひどく恐れる御連中もゐるにはゐるが、そんな人は極く少ない。

晝間に行つて見ると、此町は非常に人口稠密な所の樣に見える。併し此町は差程、人口の多い所ではない。唯晝間は人々が往來で色々と仕事をするから多い樣に見えるので、夜分になれば人々も仕事を止めるから、此町の眞の姿を見得る譯である。

又、お多分に洩れずここにもアラビヤ人其他の露天商人がゐて、晝中、玩具とか、靴下止め、其他ズボン釣等を籠に入れて抱え、彼方此方とぶらつき乍ら商品を賣り歩くのが見受けられる。

（4）

巴里にはまだユダヤ人の居留地がある。それはロジエール街の附近とフラン・ヴルジョーア街からプロバンス街までの間にあり、此處には澤山のユダヤ人がゐて遺憾なくその國民性を發揮して居る。

此街區に入ると、種々なる國の訛り言葉を聞くが、そこに一貫したあるものを見る。それはエスラエル語である。

商店のガラス窓も其文字はエスラエル語であり、家々の內部から洩れる、叫び聲、喧嘩の聲、議論の聲、喜び騷ぐ聲——其等は皆エスラエル語である。

食事頃になると、フライ料理の臭氣が街頭まで漂つて、家々の窓の所から時々、鈍重相な光澤のないセミツク人の顏が表はれて、彼等の蒼白になつた顏貌は昔からの彼等民族の窮乏さを物語る樣である。

然し、凡て是等の不幸は今徐々に恢復の緒にあるのだ。

人々は働いてゐる。多くの人達は商賣に勵んでゐる。手に入れ難きものを賣つて金を稼いでゐる。

彼等は商賣の仲立人となつて、彼等のみがなし得る仕事を絶えず見出す事に努めてゐる。かくして彼等は其地盤を固めつゝあるのだ。

又、人々も彼等に衛生的觀念を與へて居るので、非常に清潔である。

併し彼等は人々から感壓される事は欲しないのだ。

曾ては、彼等は靴襪を纏つてゐたが、今は全く立派な紳士である。彼等は絶えず新しい生活を採用して、時勢に遲れない樣に努めると同時に、其聰明さと、根强い忍耐さとを以て、彼等に適した仕事の發見に努力をば拂つてゐる。

又、語學に對しても非常に器用であつて、佛蘭西に來て少し經つとすぐ喋り得る樣になり、もの〻三ケ月も經過すれば流暢に會話し得るまでに至る。

彼等は今まで實際色々な商賣に手をつけて見たが、彼等に最も適したものは寶石の賣買であると悟つた。

であるから、同國人の集る居酒屋などを目につけて賣りに歩く。

又、婦人達も今までは內氣で外出を餘り好まなかつたが、時勢と共に徐々に變つて來た事は勿論である。彼女達は今は夫に伍して道を歩く樣になつた。

此町で奇妙に感ぜられる事の一つは、非常に澤山の居酒屋があり、其處に或る日を定めて、殆んどあらゆる職業の人達が集つてくる事である。

卽ち此日は、居酒屋は市場になつてしまひ、買手と賣手の間で寶石の値が聲高らかに呼ばれ澤山の取引や交換が行はれる。

であるから外見は普通の市と何等異りない樣であるが、寶石以外の客は待遇が悪い。

寶石專業家は三々伍々と或は群をなしてやつて來る。彼等は丸で半ば乞食の樣な恰好をしてゐるが高價な寶石を澤山に持つてゐる。

彼等が小脇に抱えた黑カバンを開けば、そこに燦然たる寶石が澤山輝いてゐるのだ。酒場は直ちにお客達に占領される。それからエスラエル語特有な高い調子で場內は喧騷を極めてくる。それは丸で

文字通り喧々囂々の巷と化してしまふ……

胴衣とかズボンのポケット、或は新聞紙、きたないハンケチ――其等の中から目映いばかりの寶石がキラ〳〵と輝き出る……

此等の商人の間に交つて時々、ルバンチン人（近東地方の人々）の姿を多く見受ける事がある。彼等は寶石の鑑識に付いては特に秀れた技能を持つてゐる國民である。

彼等の中には又別に、出來るだけ高價に品物を買ひ取る人を見付けるべき特別の仲間をも入込ませてある。

であるから、若し讀者達が偶然に行つたとすれば、彼等の仲間達は、讀者が渇望してやまぬ寶石を無作法に高々とあげて見せるであらう。

で若し定め値段でも買手がない時は、競賣でもする樣に其値段を買手が附くまで下げて行く。

かくして人々は爭つて買取る、そして最後に前記の居酒屋で其利得の分け前をする、その分配法は各仲間同志の出資額に應じてなす事は勿論である。

彼等は一種の企業組合（トラスト）の樣な組合を作つてゐて、寶殘りとか、古（ふる）の寶石等を始末する。

この樣にして何等骨を折る事なく商品を寶捌く事にして居る。組合制度を作つたと云ふ事は如何に彼等が進歩的であるかを物語る好例であらう。彼等は此組合を唯作つたと云ふばかりでなく、研究に研究を重ねて、如何にしたら莫大な利を得るに至るかを絶えず念頭に入れて居る。

要すに、このロシエール街及びフラン・ブルジョーア街に至る此一區劃は、他日必ずや黄金の完全なる支配者となるべき所である。

現在の彼等は、巴里に、彼等の特別な精華と、寶買に對する先天的素質とを敎へつゝあると云つても過言ではないだらう。彼等は巴里商業界に對する、絶えざる大なる刺戟劑である。

彼等の大多數が金持ちになりつゝあると云ふ事は屢〻聞く所である。併し此等の猶太人は唯金を貯へる事のみに熱中しておるのであらうか？……　我々は愼重に彼等の行動を注視せねばならない。

然し彼等は天性から商業が好きなのは確かだ。此區劃に多少とも長く住むと、殊に若人達は此處から立去つてしまふ傾向がある。そして思ひ思ひの方面に商賣を求めて四散する。

そして相當に資力のある者は、ヴェイル・デュ・タンプン街或はリボリ街等に堂々たる商店を出して居る事は讀者の御存知の通りである。

裁縫は又巴里の一特色を形作るものであるが、此區劃の大多數の人々は又之を營業科目としてゐる。彼等は最初の內は、この下請貧人であつたが後には其仕事場を漸次擴張して行つた。

ボルト・サン・デニーの角や、サンティエ街の附近は裁縫に關する彼等の根城である。

(5)

巴里の裁縫工場からは毎日、精巧な裁縫製品が澤山生產される。

が、其等工場の親方の多くは猶太人であつて、巴里人は殆んど例外なく其處の職工である。

彼等巴里人は毎日毎日意氣地なくも僅かの給料で猶太人に使はれて又、その事を一向無頓著で知らぬ氣に心から滿足して居る。

裁縫女工は多少の差はあるが約十フランから十五フラン位までの日給を貰つて毎日働いてゐる。パイ街の大店などでは、技術の優秀さに從つて彼女達は日給二十フランから二十五フラン位まで貰ひ、下請女工は九フランから十五フランまで支給されて居る。

彼女達は普通、フォーブル・モンマルトル街からボルト・サン・デニーに多く見出せる。

其處は、顏にお白粉を塗り、唇に紅を付けた女達の笑ひ騷ぐ聲で實に喧噪を極めてゐる。笑つたり、走つたり、押し合ひへし合ひしたり、恐らく其雜踏は到底此處以外では見られぬ光景であらう。

こうした四時間連續的に机に据はるべく餘儀なくされた後は、此小世界も幾分寛いで落付いで來る。そして此町には煌々と電氣が輝き渡るのである。

この樣にしてここの人々は其生活を暮らすのであるが、何時もニコ〳〵と微笑をたたえる事を忘れない。彼等の希望と云つたら金の縫ひ取りした着物を著ていつもニコ〳〵と笑みを浮べてゐる皇子樣になる事である。

然し、こんな皇子樣なんかは勿論あり樣筈はない。然し、職工も、雇人もそれを夢想しつつ熱心に働いてゐるのだ。

裁縫女工の中で、もし給料が安くて其生活が不如意である場合は、一人の友達を作り彼と給料を一緒にして生活の不如意をたしたり、活動寫眞を見たり、其他欲しい物を買つたりする、此お友達が多く彼女の夫となるのである。然し其初めには何等夫婦になるなどとは考へていない樣だ。

然し獨身女工も、其等の友達又は家庭がないからと云つて不平は言はない。概して彼女達は其給金の爲めか知らぬが茅屋に住んでゐる。時として、彼女達は、お白粉、口紅を買ふとか、貯金をするとかの爲めに、食ふものも食はずに居る時もある。

すると讀者達の中にはすぐ彼女達が淫賣をすると考へるかも知れぬ。然し男に身を委す事は屢々あるかも知れぬが、金で賣淫をする事は殆んどないのである。

彼女達は何時も不平をこぼしてゐるが、貧乏と云ふ事に關しては一種の自重自尊の心さえ持つてゐる。

且又、彼女は自分の現在やつてゐる職業を無心に愛してゐる。唯空に燦然と輝く星を見、自已の貧弱な生活を想ふのである。

誰も、此可憐な裁縫女を憫んでも眞實に思ひやる者はない。

唯、人々は彼女を見て冷かに笑ひ、通りすぎるのみである。

高價で綺羅びやかな着物をきた貴婦人は、其着物の影に如何に多くの是等の裁縫女が眼を痛めたり、不潔な仕事の爲めに肺を犯されたりしたかを少しも考えない。

ボルト・サン・デニーで作られる裁縫品は、安物ばかりでなく、大商店に飾られるもの、及びアメ

リカ輸出の高價なものまである。

是等の贅澤品を述べるには、ペー街及び、シャン・ジェリゼエ街の附近に就き書き記す必要がある。

然し、顧客が如何に高級なものに變つても、彼女達の給料は少しもあがらない。

一萬フランの着物或は六百五十フランの仕立料でも此貧弱な藝術家の手には少しの利益も入込まない。

粋な女がけばけばしい着物で飾り立て男を誘惑し得るのも皆此の裁縫女のお蔭である。

男が其戀女を漁り求めるのも皆彼女達の作つた着物のお蔭である。

人には時々その代表的な仕事場などで一萬五千フランもするサファイヤーを見受くるであらう。裁縫女達は其等の寶石で熱心に着物を飾り立てるに非常な努力をする。此し此贅澤を極めた衣裳の中に埋つてゐても彼女達の生活は餘りに貧乏なのである。

此町が日に日に大きくなつて行けば行く程、贅澤な仕上げに追はれる裁縫工場は增加して行く。ボルト・サン・デニーは最早此種の巴里工藝の中心地となつてしまつた。そして、セバストポールの大通には、裁縫女の就職紹介所もある位だ。

若し、讀者が早朝其處に行くならば、其紹介所の前には行列をなして集つてゐる不幸な男女の裁縫志願職工を見受けるであらう。彼等の末路を考えてやるがいい。彼等は初めは、僅かの金しか得られない。殆んど其金だけでは其日の糧食にもあたらないのである。而も其給料は容易にのぼらない。

若し、我々がこのボルト・サン・デニーを曲り、ボルト・サン・マルタンに足を運ばせるならば未來の名優を以て自任する多くの男女の俳優の卵のゐる所に出る。

此處には、音樂及び俳優學校のある所で、自分の咽を唯一の商賣道具とする職業婦人が澤山見受けられる。彼女達の中には僅か數日の内で黄金の洪水を易易と儲ける者もある。

彼等女優等の素行は屢々放埒に流れ易い樣である。之と云ふのも、表面的ではあるが、彼女達は接吻を誰よりも多くするからであらう。

然し、實際は彼女達は、假令空腹であつても、又如何に生活が不如意であるとも、出來るだけ誘惑には反抗してゐるのである。

大戰前までは此町は多くの無職者達で非常に騷々しいものであつた。現在では、是等の無職者は僅かな金を儲けては活動寫眞に殺倒してくる。

こうした失職者はどうも致し方のない事で、アメリカを含んだ凡ての國々に於ても、この樣な現象はあると信ずる。

かく、芝居のお客が活動に奪はれて減少して行く結果、女優達は今や、別の方面で金の儲かる遊を求めなければならなくなつた。

ストラスヴルグの大通りや、サン・マルタンの附近の居酒屋等で人々は、顏に化粧した十七八才の婦から五十五六才位まの婦人連を見受くるであらう。

彼女達は其處の大理石の圓テーブルに坐わり、ドッと笑つて生活に對する苦痛の涙をば忘れる事に努める。

其處に賣淫が全然ないとは云へない。然しそれも、居酒屋の亭主に強要されて、いかさま唄ひ女、いかさま踊り娘などが客の顎をくすぐつたりする位である。

ウルトラ・シックの上海ガール

彼女達はかくの如き恥づべき事はしないのだ、唯つつましやかに時節を待つてゐる。何故と云ふに萬事は變遷するものだ。やがては此活動寫眞の人氣も四散するだらう。そうすれば又彼女達の時代が來る。それでも失敗すれば、アメリカに行くのだ。

さて再び大通りに立戻つてオペラ通りとマドレーヌ通に行つて見る。此處は絢爛眼も目映い粹な街區である。

此處に就いては別に書かない、唯讀者がここのペー街や、ヴアンドーム街に行けばよい。我々の下手な筆でくどくどと書くのはそれだけ野暮であらう。

それに又吾等の目的も、仕事をしつつある巴里を紹介するにあるので、巴里の出來榮えをお知らせ致すのではないから。

然し、唯一言だけ言つておくが此處は澤山いかさま周旋屋だとか、カフエーなどのある所で、一部の人達が盛んに巴里の悪口を言ふべき材料のある所である。

佛蘭西の代議士達は白人女の賣買禁止法案に案外冷淡なのに驚く外はない。そして中には白人女賣

繪入雜誌に出された秘密マツサージの家の廣告

買の如きは全然あり得ないと思つてゐる人が多い樣である。未來ならいざ知らず現在に於ては巴里にそんな事實はないと信じてゐるに相違ない。

然し、事實そこにはいかさま周旋屋とか、曖昧屋などが此大通り（グラン・ブルヴァール）のカフエーに出入して大仕掛な賣買取引をやつてゐるのであると……以上が惡口家連により盛んに散布なれる罵倒の好材料をなすものである。

この樣な下らぬ風評は直ちに世間に弘まるものと見える。

然し、之は明に誤つてゐると思ふ。一體、世界のどこの國の淫賣婦も一樣に巴里女でありたいと常に願つてゐるのである。それは一つは巴里女は美人であり又數も尠い爲めでもあらう。

ピカデリーや、附近の州などに行つて見ると時々、勿體張つた樣子をした女などが怪しい巴里語で……

「ね——妾……こう見えてもパリージェンヌなのよ……」

と云ふ奴にぶつかる事がある。

こんな事は誰でも地球上の何れの國に旅行しようと、或は歩道の上に、或は娼家などで、所謂自稱巴里女なるものを見受くるのである……此種の自稱巴里女で最も多いのは、ドイツ女、オランダ女、或はベルギー女、時としてはスイス女等で、英國女、猶太女、バルカン女、イタリー女、及びイスパニヤ女は尠い樣である。

佛蘭西女は佛蘭西の男子同樣旅行が嫌いである。まして、外國に賣られて、醜業をするなどと云ふ女は殆んどないのだ。佛蘭西女は巴里女と同樣家にあつては眞面目な市民であり、儉約家であるのだ。

彼女達が勤儉貯蓄心に富んでゐると云ふ事は、果して其國の女が淫蕩であると言ふ事を意味するであらうか。

事實、又佛蘭西の預金は他の國々の凡てよりも多いのである。そして我婦人こそは貯蓄の殿堂の主なる管理者なのである。

之を要するに、我國の代議士諸君は議會に向つて白人女賣買禁止法案などは提出しない。又この事を考へて見た事もない、何故と云ふに、かくの如きものが問題になると云ふ事は已に其國の醜惡さを

暴露したものであるから。

此問題が又世界を廣く見て、人道問題、博愛主義の見地から論ずる場合には又別である事は云ふまでもない。

且又、此醜惡事は此の刑罰懲戒により除去せんとする事は不可能である。公道德の改善によりてよく矯正し得る事と信ずる。

我巴里は、如何に人々から惡評を蒙らうとも怒る事はしない、唯眞面目に、缺陷あらば之を直しあくまで眞劍に改良を努めつつあるのだ。

獨逸、及び英國の刑罰的懲戒は何等同性愛を制止する事が出來なかつたではないか。

巴里には此種の惡風に對して何等奇妙な懲戒も存在してゐない、がかくの如き變態な同性愛はあまり見當らない。

同性愛の客の爲めに作られた特別なカフエーなどは我巴里には殆んどない。

ベルリンには如何に其等のカフエーが增加しつつあるか、又ロンドンに多少あり、更にベニスに至つてはベルリンに劣らぬ程其數が多いのだ。

バルカン及びコンスタンチノープルでは婦人のみならず男子までも自由に賣買されると云ふ事だ。

イタリーに關しては、有名なミラノの醜行がある。

（6）

家具類、應用美術品類、精緻な工藝品及び裁縫製品は巴里の有する眞に愉快な產物である。此事に關する以上、巴里が「ルユテース」の時代にあつては、かくの如き特產品は產出しなかつたらう。

巴里の貴金屬は確かに優雅さと特別な輕妙さとを持つてゐる。これは應用技術によつて加工されてゐるからである。

然し、吾々は、外人達やお客から、佛蘭西の貴金屬は餘りに高價にすぎるとの非難を屢々聞く。

極く小量の黃金でも、それが念入りに加工されてある場合は法外な高價となるものである。又寶石類にした所で非常な丹精をこめて仕上げされた場合は屢々高價となるものだ。

此今私の云つた點に關しては、外人は易々と反駁されるかも知れない。卽ち其等の貴金屬の高いのは貴金屬商が餘りに多く利潤を貪る結果なのだと……而して又、ロンドンや、ベルリンで見受くる貴金屬の雛型は巴里のに劣らず美しくあるばかりでなく又、大きさも重さも相當にあると……御非難なされるかも知れない。

別に言はなくても御存知の事と思ふが、ロンドン及び其他の都市は特に此等の商品の取引の盛んな所である。從つて賣買の競爭も激甚で、勢ひ利益を度外視しても割引かねばならぬ狀態にある。

であるからどうしても品物は質より量となつてしまふのだ。

これと同樣な事が毛皮に就いても言へる。巴里に於ては、毛皮値段は非常に高價なものである。巴里に於ける狐の皮三枚の値段は、ロンドン或は、ライプチヒに於てはより高價なシベリヤ產の貂（てん）の毛皮三枚に匹敵する。

然し、それに施された粹（いき）な加工的技術に關しては、ロンドン、ライプチヒ、及びアムステルダムなんかは巴里の足下にも寄付けない。

試みに之が具體的な例を取つて見る。

一九一二年に於て、全部銀張りになつた狐の皮一枚の値は、アムステルダムにあつては、四百五十フランであり、同じ品物の巴里に於ける値段は千五百フランから千八百フランの間を上下してゐた。

其代りとはモロッコ革商人が完全な專賣權を握つてゐたのである。

然し、如何なる國々に行つたとて、巴里程、婦人用カバン或は小形紙入等にそれ程微細に、精巧に、且輕妙優雅に仕上げがされてあるものがあらうか。

確かに英國製のものも特長は持つてゐる——例へば皮が固くて非常に滑かである。併し、眺めたり觸れたりして何んとも云へぬ恍惚な感じに打たれる如き特長はない樣である。

獨逸に於ても、毛皮販賣はモロッコ毛皮商の手に獨占されてゐる樣である。彼等は自由自在に毛皮類の値段を作つてゐる。

又、巴里產物の一つとして美しい床飾りがある。それは最小限の原料品を以て、念入りに加工仕上けされたものである。

讀者がペー街や、オペラ通りで見られる最上のモロッコ革の製品は皆一樣に巴里の小仕上げ職人の手により出來たものだ。

此仕上げ職人はそれ自身已に巴里の名物で、何處に行つたとて彼等程の熟練者は見當らない。

彼等は巴里人氣質を遺憾なく多分に持つて、頗る自由を尊び、氣に入らぬ時は親方や職工長の命もきかない。であるから、自由の爲めには、苦痛が增してこようと少しも念頭におかない。其代りに機嫌のよい時には、二倍も三倍も仕事をする。

仕事場は多く家の五階にあるが又屋々二階にある事がある。

大勢の職人達は一室で仕事をする。一方の仕事臺の上で皮とか繻子とかを切る者があると、窓の後では、裁縫機械が盛んに活動して其傍に、他の職人や其處の親方が熱心に働いてゐると云ふ有樣である。

他の窓の傍では、此親方の細君が仕上げをしたり、傑作品とすべく最後の技巧を加へてゐる。

が、一體に利益は尠いので仕上職工は資本家となる事は出來ない。

それでも人々は、別に不平も言はず、愉快に歌などを歌ひ乍ら熱心に仕事をやつてゐる。

仕事に疲れると身を搖振つて立上り、大きく呼吸して、階段を降り何處かの居酒屋でも入つて清涼劑でも飲む。

裁縫女の給料は仕上高賃拂ひ或は日給拂であるから男達の樣に、疲れたからと言つて外出は出來ない。

晝食になると人々は附近の料理場などに行き指で食物をつまみ乍ら食ふ。

此處に於ては、仕事は苦痛ではなくて、其日の愉快な遊びなのだ。

仕立職人は新しい型を考案し、それが特に新奇軸であれば人々から賞讃の辭を浴びる。

彼女達は給料を貰へば殆んど全部消費してしまふ。であるから永久に金持にはなれない。金がなくなると又より立派な新しい型の發明に努力する。

彼等は女と大通り(ブルヴァール)や粹な町町を歩いてゐる時でも、彼等の眼は絶えず商店の陳列棚に掲けてある新型に向いてゐる。そして時には、他人の製作品等に輕蔑的な眼付を送り

「ふん……なんだこの樣(ざま)は……俺の作つたものとは、てんで較べものにならねェ……あんまり下手すぎてとても見ちやいられねェ……」

此男の言葉を聞いて女の方も末賴(すえたの)もしく思ふのである。

モロッコ毛皮商のみ特別に集つてゐる所を述べる事は困難である。彼等は何處にも住んでゐるから……然し比較的彼等の多くゐる所は、レパブリック廣場及びタンプル街であらう。

モロッコ毛皮商と他の小商店とは全然比較にならない。其處に大きなハンデーキャップが存在してゐる。卽ち小商店はモロッコ毛皮商の如く原料品を直接彼等の工場に供給する事は不可能で、從つて商品に對する莫大な利益は皆モロッコ毛皮商に先取されて居る。要するに仕上工は彼等の全部の給金を使つてしまふ。もし偶々貯金して居る者があるとすれば、それは彼がしたのでなくて彼の忠實な細君のお陰であると云つても良い位だ。

以上が仕上職工、及びモロッコ毛皮商と其種々なる生產品に關する大體の記述である。

唯最後に一言する事は、其等仕上げ職人が最も愛してゐるものは自分の藝術の仕事であり、又自由である。此二つを愛すが爲めに、彼等は熱心に仕事臺に就くのだ。工場、仕事場は唯彼等の熟練的技能のために開放されて居るものにすぎない。

（7）

今まで歩いた道を更に續けて行くと「學校町」及びサン・ゲルマンの大通り（ブルヴァール）附近に達するであらう。

此附近に行くと我々は更に又別の職人達を見るのである。それは製本屋だ。

不幸にして未だ巴里の製本技術は餘り良いものではない。それは確かに良いものでないかもしれぬ。

餘りに多くの嬌（しな）めかしさと不確實さとを有してゐるからである。

巴里に較べたら、他の諸大都會はより秀れた製本技術を持つてゐる事であらう。

巴里の製本屋は確かに必要的な要素に缺けてゐるらしい。

第一に重要な皮に就いて云へば、それは大戰後から價格が非常に騰貴してしまつた。

然し、彩色加工せられた皮類は佛蘭西の一特色をなすもので、世界の大皮商人は多く皮類を佛蘭西に仰いでゐる。

であるから、ロンドンで見られる、非常に綺麗な裝幀した、相當價格の本の表皮は佛蘭西製のものであると云ふ奇觀を呈して居る。

概して巴里製本屋は獨創的な新奇軸を出さうとして、却つて實用的な特長を失つた觀がある。

又其上に、製革工業も、獨逸、オーストリヤ其他に比して其進歩が遲（おく）れて居る樣である。

又其等の諸國では、佛蘭西の全然出來ない事——例へば天鵞絨（ビロード）に雲（うん）を燒付けたり、粉末を振掛けたり又果實を利用して本の裝幀をする——等を實行してゐる。

然し、我々は我國に於てかくの如き事を容易になし得る技術家が全然存在しないとは考へられぬ。

特に巴里にはどの他の所よりも秀れた技術家が澤山にゐると確信してゐる。であるから、若し彼等に必要な原料品を與へ、古い慣習から彼等を開放させてやるならば、獨墺諸國に比し、より秀れた作品が出來る事と信ずるものである。

論より證據、ォデォン通り附近に、其典型を見るのであるが、不幸にしてそれが未だ一般に普及されて居らぬのである。

充實した美しい皮の製本裝幀！　それは誰れしも嬉ぶ所である。それは何時見ても、心地よい氣持

を與ふるものである。

が、巴里に於てはそれが尠い。若し人がそれを手に入れようとすれば、非常な高い金錢を拂はねば得られない。であるから人は唯布製の製本裝幀で滿足しなければならない。これは一寸非常に素的に見えるが、如何に最眞目に見ても美術的優美さがない。

が然し、本を製本する目的が圖書館に長く保存する爲めのものだとすれば、本の裝幀が布製であらうと別に差支へはない筈だ。

何んにしても、原料品が非常に高價の爲め、其處に大困難のあるのは致し方がない。

以上の製本裝幀の他に、此「學校町」は又、印刷術の盛んな所である。

此處の印刷術に關する限り、巴里は優秀な技術を持つてゐる。その銅版印刷の精巧、輕妙は見るからに氣持よく、到底他の何處に行つても見られぬものであらう。

此種の印刷は町全體に普及され、大抵の大商店では之を實行してゐる。

大概、その技術家が自ら繪を畫き、自ら銅板に彫付け印刷にかけるのである。

であるから銅板の彫刻及び之が印刷等に關しては別に際立つて目立つてゐる所はない。

唯、印刷インキの改善、紙の選擇、其他の新しい手順等に絕えず注意を拂ひ向上に心掛ける所に其特異性がある。卽ち凡ての方面に絕えず努力が拂はれる事は到底他と比較にならぬ程である。

其他に又此「學校町」は美術的裝飾品、陶器及び素燒の窯器の產地として知られる。

此等は絕體的に巴里のみが有する特產物であらう。

實際是等工藝品の製作に從事する人々は、其製作に對する努力は非常なもので、彼等は金錢などは眼中にない、唯秀れた作品が完成すればそれで滿足し幸福に思ふのである。そして完全なものゝ出來ぬ內は絕えず研究し、工夫する。

ルクサンブルグ通りからセーヌ河畔まで、人は其處にある商店などで、非常に斬新にして精巧を極めた工藝品を見受くるであらう。

通行者などは、思はず立上り其等を凝視して

「これは素的だ！」と屢〻感歎するものである。

巴里は今や新しき榮冠を得たのである。それは遊蕩の巴里ではなくして、絶えず努力し、仕事し、向上しつゝある巴里である。

特に此「學校町（エコール）」は遊蕩などは全然謝められない。人々は唯靜肅で平和で眞面目である。其處の婦人達の多くは質素な田舍じみた素朴な態度の所有者だが又至極愛敬者である。

此處の淫賣は引合（ひきあ）はぬ爲めか漸次減少しつゝある。

それに人々も、道德的觀念が發達して居るから、榮耀榮華に憧れる醜業婦などに眼をくれないのだ。

實際此町は、精神勞働の中心地とも云へよう。人は皆自己の道を正しく行ひ、彼等の頭は知らず知らず未來の理想に走つてゐる。

屢〻意見の衝突が見られるが、それは明に、各自が銘々自己の正しいと信ずる所信を抱いて居る事を證據立てるものである。

我々は此處から、將來の精神的社會的の模範的生活が出現するのを見るであらう。

此處の人々は科學の確得、常に博愛的見地より見た科學の確得に努力してゐる。

其處には、金銀の氾濫、黃金の洪水はないかも知れぬ。併し其處のカフエーやレストランの主人達は、この質素な服裝をしたお客の中から、他日全世界の賞讃と尊敬とを仰ぐ如き大學者の出現を今か今かと待つてゐるのだ。

一體に、巴里の町々は凡て、特長があり、其處の住民達も特異性を持つてゐる。

が、特に、此サン・ゲルマン大通（ブルヴァール）り附近に住む人々は、已にセーヌ河の對岸に立つて、古き慣習の殼を破り、新しき眞劍な道へと、旅立ちつゝある人達である。

最後に、印刷彫刻業に從事する人達も美術家と見做され、多くの人々に多大の福利を與へて居るが、彼等の多く住ふ所は、ヴイスカンティ街、ボーザル街及び、ボナパート街の附近である。

此印刷彫刻は厚紙に集められ、多くの蒐集家から又珍重されてゐる。

又、此邊をぶら〳〵と歩いて見ると、家の壁などが、屢〻質素ではあるが、見るからに氣持よく何かで飾られてあるのを見受るであらう。

又、よく此邊で、無名貴家の描いた素晴（すばら）しい繪を見る事があつて、オペラ通りやローヤル街の贅美

を極めた美術陳列所でも容易に見られぬ堀出物に出逢ふ事がある。

其上一體に此町の人々は皆一樣に、內心理想を求めてやまない。此理想があるからして、金錢以上の貴いものを製出し、人々を驚歎させるのである。

我々は此町ばかりでなく更に進んで、智識の中心地を尋ねなければならぬ。

（8）

若し、吾々が學生遠の澤山に居る所に行こうとするならば、植物園（ジヤルダン・デ・プラント）の前に行かねばならない。之は非常に婉曲に言つたつもりである。更に此植物園は歐洲の何れの大都會の園と比較しても、少しも負けない所のものである。

吾々が以上の如く言つたとて誰も反對する者はないであらう。

其處は柵で圍（かこ）まれた長方形の形をして、何等けばけばしい裝飾もしてゐない。

研究の目的の爲めに培養せられた植物は巡囘員の保護の下に置かれてある。そうでなくとも人々は植物を尊敬して大切にしなければならない。

こゝには珍らしい種屬のものが色々と集められてある。例へば南瓜（たうなす）、唐辛子の變形まである。其他特殊園藝家の庭でなくては見られぬ種々な植物がある。

之を約言すれば凡てが神祕と賞讃である。

神祕は又博物館の高樓に隱れて研究に努力せる無數の學者の仕事に於ても同樣に見受けられる。

其處の訪問者達も思はず唇に指をあてゝ

「シッ！　靜かに！　餘り大聲を出しては不可ません。あの人々は皆眞摯な研究者達ですから……」

と囁かざるを得ないのである。

然し、折角の彼等苦心の研究も公開せられずに終るものがあらう……特に獨逸大學生に就いては尙更である。

ソルボンヌ附近は澤山の若き熱心な學生達がゐる所だ。其處の醫學校は殊に眞劍な學徒で滿されてゐる。

又、此處には世界のあらゆる國々の學生達が見受けられる。例へば支那、印度、シャムから北米合衆國、ルーマニヤ、チエッコ・スロバキヤの人々だ。

そして是等佛蘭西の忠實な友國の大多數の人々の住つてゐる所はかのラタン（カルチエ・ラタン）街である。

外國人は多く夫々彼等同志が集る溜り（ホテイエ）場を持つてゐる。

印度支那の人々の溜り場はソムラル街十五にある。

アメリカ人の溜り場はサン・ゲルマン大通り百七十三にあつて其處に同胞の人達が集つて互ひの親睦を計つてゐる。

ロシヤの學生はミシュレー街九に多數集つてゐる。

其他巴里大學フランス・スラヴ組合が同樣にソルボンヌにある。

ユーゴスラヴとチエッコ・スロバキヤの人々はミシュウレー街九に集る。

スカンヂナビヤの人々の溜り場はセルヴアンドニ街二十五にあり、日本人學生達はセギエ　街十八に其根城を持つてゐる。

アルメニヤの學生は巴里に非常に多く來てゐるが、モンターギユー・サン・ジユヌビエーヌ街四十九に其集會所を作つてゐる。

又、支那の學生達の家はフリユラス街一にある。最後に、此等集會所の他、全外國學生を聯合した國際集會所なるものがあつて、此處に各國學生達が集つて、友愛關係を深める爲めに、各自の理想を

交換する。此處では一切の人種的偏見を超越して、各自の抱負なり經倫などを披瀝し、批評議論し合ふ。

又女子學生の爲めにはジヤン・ド・ボーベイ街十一に女子學生佛蘭西キリスト教徒聯盟がある。又醫學生の聯盟はダンテ街八にある。そして巴里の全外人醫學生は此處に集て互ひの親睦を計つてゐる。

サン・ミチエル大通り八十五には藥學生の親睦聯盟がある。

又、凡ての國々の研究家、科學者の爲めに巴里大學科學情報局なるものが存在してゐる。此局は科學的研究の發表などを司るのであつて又ソルボンヌにあり、毎日四時に開會される。

最後に圖書館一覽表を掲げて置くが、殆んど皆無料である事は申すまでもない。

圖書館一覽表

農業大學圖書館	ベルショース街十八
醫科大學圖書館	ボナパルト街一六
アメリカンヌ	エリゼー街一〇
アルスナル圖書館	ブルイエー街一一
法律國民學校圖書館	ソルボンヌ街一九
殖民學圖書館	オブセルバトアール街二
高等商業學校圖書館	トクヴイール街四三
ギリシヤ研究奬勵連盟圖書館	ソルボルヌ
フランス銀行圖書館	ヴリエール街一
經度局圖書館	マザリーヌ街三
書籍商人圖書館	サン・ゲルマン大通り百十七
軍事圖書館	アンバリド大通り六
巴里時計學校圖書館	マナン街三十
技藝共立圖書館	サン・マルタン二百九十二

人類學學校圖書館	醫學校通り一五
建築學校圖書館	ラスペール大通り二五四
裝飾學學校圖書館	醫學校大通り五
高等電氣學校圖書館	スタイール街十四
東洋語學校圖書館	クール街二
ポーランド學校圖書館	ラヤンデ街十五
ラビニツク學校圖書館	ボークラン街九
公立敎育學校圖書館	ゲー・ルユサック街四一
フォルネー	テイトン街十二
集合圖書館（アメリカ及びラテン語）	ラスパル通り九六
ヴイクトール・ユーゴー圖書館	ボージュ廣場六
ゴブラン國民製造圖書館	ゴブラン街四十二

セーブル製造圖書館	コンティ波止場二十三
商工大臣圖書館	ヴアレンヌ街八十
金錢及びメダル管理圖書館	コンティ波止場十一
軍隊陳列圖書館	アンバリード・ホテル
ギメー博物館圖書館	イエナ廣場七
社會博物館圖書館	ラ・カーズ街五
歷史博物館圖書館	ジョフロア・サン・イレール街三十六
彫刻博物館圖書館	トロカデロ廣場
ナショナール	リシユリユー街五十八
共立圖書館	オブセルバトアール廣場
社會研究委員圖書館	ラ・カーズ街七
フランス東洋圖書館	カデー街十六

巴里兒童教育圖書館	モンマルトル街四十七
サント・ジユヌビエーヴ	パンテオン廣場八
スカンディナーヴ	パンテオン廣場六
海水路學圖書館	大學街十三
巴里アメリカ協會圖書館	ブフオン街六十一
フランス好古學協會圖書館	ルーヴル宮殿
アジヤ協會圖書館	セーヌ街四十一
フランス化學協會圖書館	レンヌ街四十四
社會經濟協會圖書館	セーヌ街五十四
地理學協會圖書館	サン・ゲルマン大通り一八四
フランス地理學協會圖書館	ツーロン街八
清教徒歴史協會圖書館	サン・ペール街五十四

ツルゲネフ	バル・ド・グラース街九
裝飾術中央協會圖書館	リボリ街一〇七
巴里歴史圖書館	セビネー街九

以上の圖書館に入場するには夫々特別認可を必要とするけれども、それは容易に得られる。

次に博物館の一覽表を掲げて見る。

博物館一覽表

國民記錄博物館	フラン・ブルジョアー街六十
裝飾博物館	リボリ街一〇七
軍隊博物館	アンバリード・ホテル
天文學博物館	オブセルバトアール
バルザック博物館	レイノール街四十七

美術學校博物館	ボナパルト街十四
國民圖書館博物館	リシユリユー街五十八
カルナバレー	ゼヴイニエー街二十三
セルニユシー	ベラスケー街七
クラニー博物館	ソムラルド街二十四
殖民貿易博物館	オルレアン・ガルリー
ケアン夫人博物館	セーヌ街一
デユブイトレン	醫學校街十五
エネーレイ博物館	ボア・ド・ブーロニユー五十七
人種學博物館	トロカデロ宮殿
ガリーラ	スルヴ・ピエル一世通り十
ゴブラン博物館	ゴブラン街四十二

戰爭博物館	ヴアンサンヌ城
ギーメー	イエナ宮殿
ギユスターブ・モロー	ロシユフウコール街十四
ホーイ	デユーロック街九
自然歷史博物館	植物園
巴里市衞生博物館	セバストポール大通り五十七
インド・支那博物館	トロカデロ宮殿
林業博物館	バンサンヌ森
ジヤックマル・アンドレー	ホースマン大通り一五八
鑛物、地質、化石博物館	サン・ミシエル大通り六十六
モネテール	コンテイ波止場十一
ナポレオン	マルメーゾン城

オルフィラ	醫學校街十二
教育博物館	ゲー・リユサツク街四十一
小宮殿博物館	アレキサンドル三世街
フアール博物館	トロカデロ通り四十三
革命博物館	ベルサイユ
ロダン博物館	ヴアレーヌ街七十一
比較彫刻博物館	トロカデロ宮殿
セーブル製造博物館	セーブル
ベルサイユ國民博物館	ベルサイユ
ヴイクトール・ユーゴー博物館	ボージュ廣場六
ビユー・モンマルトル博物館	トーラツク街二十二

讀者諸の中には、今まで未知であつた博物館のあまりに多いのに一驚する事であらう。

又巴里人でさへ一度も訪問しないで唯其前ばかりを通過してゐた博物館が如何に多かつたかに驚く程である。

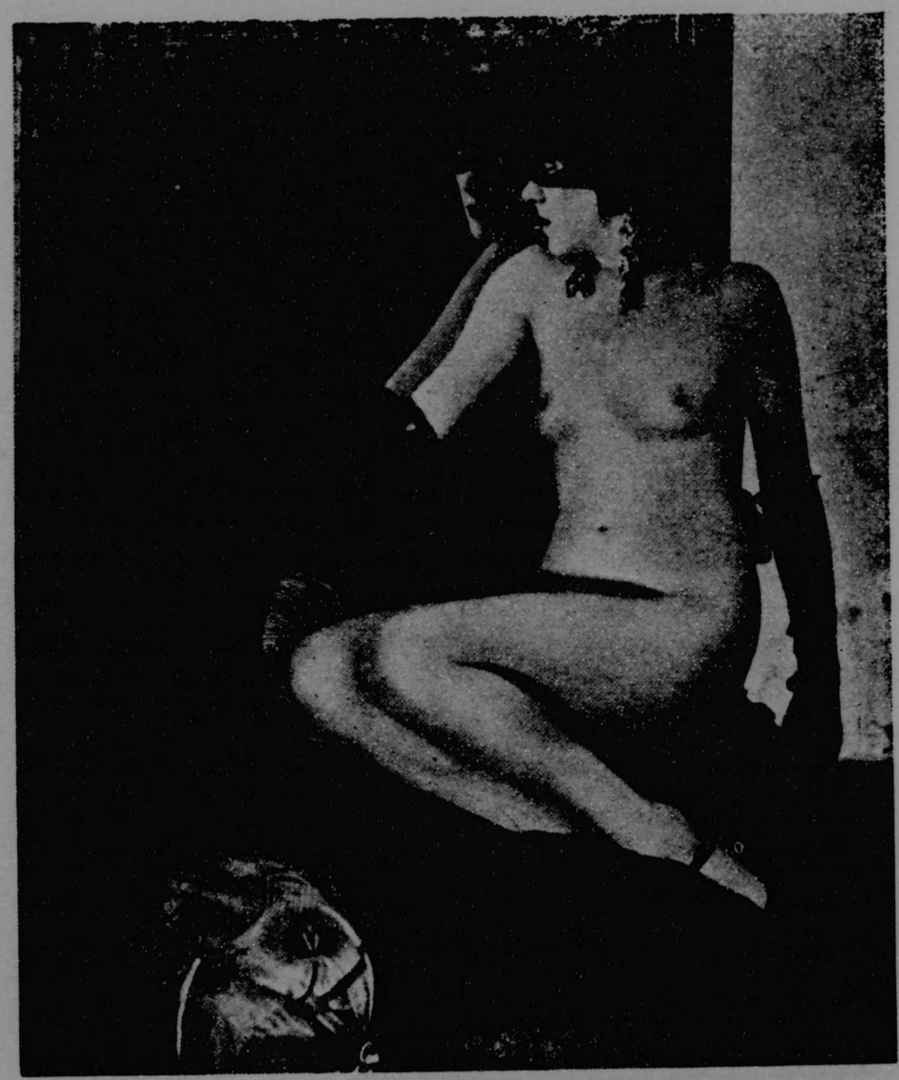
然し、大巴里の烈しい勞働の實情を知る爲めには是非とも此等の博物館を訪ねて見なければならない。

博物館は何時も人々で一杯で、開館時から閉館時まで特殊研究家達は熱心に研究、調査、探索に勵んでゐる。

博物館は日により金錢を徵收する時と無料で見せる時とある。併し其徵收料も極く僅かなものである。大體一週の半分は金錢を取り、後の半分は入場料を取らぬのが普通である。藝術、工業、科學等に關し巴里は實に世界無比の記錄物件を持つて居ると云つてもよい。

不幸なのは、それの維持方法の惡い事と、嚴重の取締りの缺けて居る事だ。

維持方法の點に關しては、殘念乍らロンドン及びベルリンの博物館の方が上だ。是等の都市ではよく其寶物の値打を發揮させて居る。



裏面

巴里には、是非とも印度の狩獵家の如き鑑識力が必要である。肝心の人々が見たいと思ふ藝術品は隅の方に置かれてあると云ふ有樣である。

ロンドンに長年滯在して、爽かな氣分を味つて來た人が、一度我巴里の郵便局か博物館に入ると、彼は思はず顏を顰めて叫ぶであらう。

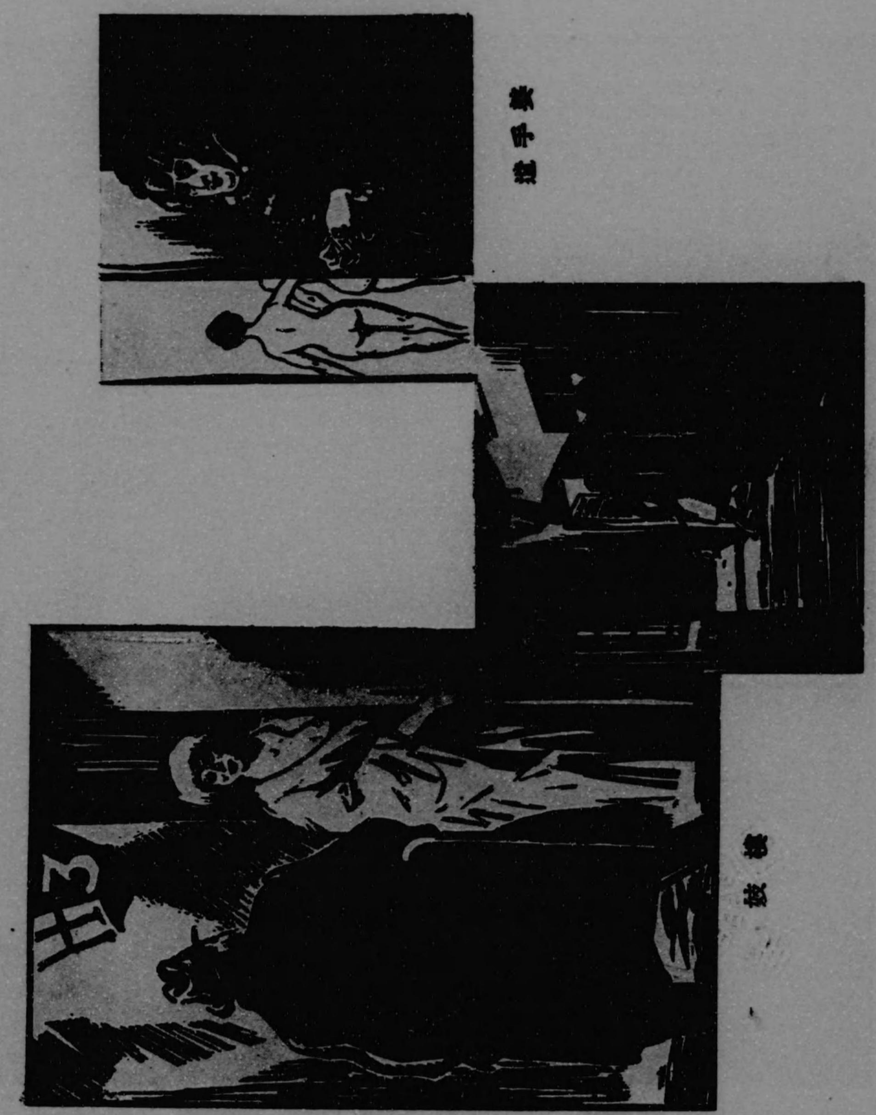
「なんだ、この醜い樣は……」と。

我々は殘念乍ら此非難に反駁する言葉を持たない。

我々は巴里の美を誇りたい。巴里が世界無比の所であると絶叫したい。我々は巴里が如何に缺點を有するとも恐れるものでない。何故と云ふに諺にもある通り、眞にそれを愛する人は、心からそれの缺點を訂正してくれる人であるからだ。

實際、巴里の特色は巴里により隱されて居ると云つてよい。一言にして言へば、それは自由な獨創力であらう。

カルティエ・ラタン區は曾ては書籍の中心地であり、智識の中心地であつた。それが漸次分離して、出版業者は



新しい區を求めて移轉し、其處に店舗を作つて彼等の店を開くに至つた。

之に反して「學校區」は相變らず古本屋の領地である。

昔の書籍はオデオン通り附近か、ボナパルト街又は、ソルボンヌ町の背後の通りで見受けられる。然し其本の數も極めて少い。古本屋は今では古本鑑定家であり又古書蒐集家でもあり、容易に其集めた本を賣らない。

（9）

巴里の持つ多くの特質の中で、最も魅力に富むものの一つとして掲げ得るものは商品陳列の技術であらう。

他の大都市の商人達は、自分が賣らんとする商品の全部を硝子張りの見本陳列棚に詰込んでしまふ。商品はこの様に定價札を附して、ごつちやに列べられて居る。

商業的見地より見れば、此方法は確かに最良なものである。この様に澤山の商品と、其定價とを一時に見せる時は顧客を誘惑せずにはおかない。

以上のものがロンドン其他で見受けられる現象で、こうした商店が大通りに並んだ所は宛然大勸工場の觀がある。であるから其商賣取引も盛んなもので巴里などは比較にならぬ。

然し、ロンドンなどでは客を心から誘惑し陶醉させる事は不可能である。又其處の人々もそんな事は念頭にない。唯「氣の利いたもの」でありさへすればいいのだ。

商品陳列は第一に一眼見てもそれが藝術的でなければならない。啻に其商品の價値を客に知らしめるのみならず同時に又魅力あるものでなくてはならない。

實際、オペラ通り、ペー街、及びリボリ街等の絢爛さは到底他の何處にも見られぬ所であらう。

寶石商人などは英國風の陳列法を採用してはゐるが、決して陳列棚にごちやごちやと詰込み主義を取つてゐない。

各商人達は盛んに金銀寶石を燦爛ときらめかせてその陳列棚をして競ふて其獨創的優美さの發揮に努力させておる。

同様に、大商店等も內部は商品の亂雜に排列されて居る所もあるが、其陳列窓に至つては、夫々、色彩と線の配置の美を競ひ、思はず行人をして立止まらせて居る。

此色彩と線の配置法こそは、巴里の持つ唯一の特色であつて、これこそ巴里人の生來の趣味と合致したものであり、如何に萬事がアメリカ化され様と衰へるものでない。

そして、人々はどの様な商品であらうとも、細心にして、優雅に陳列をする様に努力する。

若し讀者達がかのシャン・ジエリゼエ通りまで足を運ばせて行くならば、最大限にまで利用された是等の美術的陳列法を見るであらう。

更に我々は自動車に就いて述べて見よう。自動車は殆んど佛蘭西の各地に於て製造される。然し、獨特の藝術味に溢れてゐるものは巴里製の自動車である。

綠の樹林の間を疾走する絹綿天鵝絨(ビロード)張りの自動車！　鋼鐵の美と銅の光澤とが燦爛と交錯せる瀟洒な車體美！　凡てが完全な調和である。

人々はそれを見て我を忘れて立止り、其優美に見惚(と)れる事であらう。

佛蘭西の自動車工業に關する世界的評判の維持の爲めには、巴里は絶體的に必要である。

唯製造するばかりでなく、其製作技術の如何に卓越せるかをば、全世界に知らしめる必要がある。

シャン・ジエリゼエ附近の古物商達は盛んにラスペール大通りの古物商と競爭をやつてゐる。

併し、此種の商賣は他の大都會に比べて少い樣である。

之は明に巴里が徒らに過去のものを求めずして、思ひを將來に馳せてゐる事を物語るものであらう。

古代の美術に接する事もよいが、絶えず努力を持つて作られつつある獨創的斬新な藝術を求める事も必要である。

實際、シャン・ジエリゼエは解放された美術陳列所だとも云ひ得る。云はば其處は巴里露天商人が各自得意の技能を披露して居る所だ。

人々は、全腦力を傾けて、陳列の表現美に努力してゐる。

外人客などがよく、巴里は僞造寶石の國である、と云ふが、この僞造と見られた寶石こそ、無比の優美さと、魅力とを持つてゐるのだと附言したい。

必要は工業を生み、前に吾人が絶叫した如く、寶石細工は、金銀細工と同樣、價格を超越してしまつた。

又、凡ての商品陳列の中、頸飾りが最も重要な位置を占めてゐる。其等は一樣に、皆星の如くきら〳〵と輝いて色彩の優美さを多分に表はしてゐる。

以上述べ來つた如く、巴里には、貧弱な町町もあるが又、豪華な眼も目映(まばゆ)いばかり贅美を極めた繁

華な大通りもある。

其等町々の特異性は世界の何處に行つても存在しない所だらう。此特色とは想像と優美と、均衡とにより形作られたものである。

又、巴里の凡ての生産に於ても、吾人は上述の三要素が巧みに結合されて居るのを見る。それこそ何人も模倣し得ない巴里の特色であり、外人に對する最大の魅力である。

併し、其處に些細ではあるが暗影がある。

それは佛蘭西産業界は凡て、法外な關税制度の爲めに他國に比しハンデーキャップを附せられてゐる事だ。

之が爲め勢ひ二流商品の製造を抑制した。

今之を家具製造に其例を取つて見るならば、關税の爲めに、輸入材木は非常な高價となり、商品の堅牢と重々しさとに關しては、最早外國製造人と相爭ふ事が出來なくなつてしまつた。其結果我國全産業界に打擊を蒙らせた事は少くない。

今までの高價な原料材木品は多くヴネスエラから來たものである。が然し、其他に、佛領ギネヤ地方にも黒壇細工用の樹木を無限に提供して呉れる寶庫のある事を忘れてはいけない。

又彩色の方面にも、未知の方法が澤山あるであらう。其等を工夫發見して、新機軸を出す事に努め以て沈滯せる我産業界に一條の活氣をつける事を計らねばならない。

勇氣を鼓舞させる爲め、次の如き言葉を以て激勵するもよからう即ち……

「藝術的の裝飾は重量よりも偉大である。」

「結合は力である……」古い諺であるかも知れぬが之も此際役立つものである。

實際樅と、マホガニーの小さな葉とを、しつかりと結合すれば、銅鐵と抵抗し得る力も出るのだ。

之は凡ての他の小産業にも通ずる言葉である。そして、最小限の原料品を以て優美堅牢なものを作ると云ふモットーを忘れてはいけない。

（10）

以上巴里の眞相に就いて簡單乍ら述べて見た通り、眞の巴里は決して一部外人の言ふ樣な所ではない。

其處は現代のバビロンでもなければ、所謂昔の「歡樂の巴里」でもない。

共和制が施行されてより、道德的人格者達は互ひに誡め合つて風俗習慣を矯正したのだ。

此見地よりして、我々は巴里こそ實に文明の尖端を行くものであり、世界の惡風矯正の好模範をなすものであると絶叫して憚らぬ。

成程巴里に祕密な賣婬は確かにある。然しそれとても、日に日に減少しつつあるのだ。且又、婦人自身も婬賣などをやる事を非常に恐れてゐる。

職業婦人に就いても、如何なる商賣に從事する者と雖も、彼女達の間には婬賣婦などは見當らない。

又、女學生も、高い道德的心念を抱いて講義を聽いたり、熱心に研究したりして勉學に勵み、肉慾的快樂などの忌しい虜となる事を極力避けてゐる。

祕密に、密會を取持つ家などに出入する女もないではない。然し彼女達の名は已に警視廳のカードに寫眞と共に記載され嚴重な監視を受けて居るのである。

この樣に例外はあるが、其等の女は中產階級や勞階働級の人々ではなく、暇で常に强烈な刺戟を求めてやまないモダン・ガールの輩である。

然し此等の例とても、巴里のみでなく、ロンドン、ニューヨーク其他の大都市に同樣に見受けられる所である。

而も、其等都市に於ては、公娼制度は全然なく、皆私娼であると思へば……

これは數年前ロンドンの出來事である。贅澤な毛皮に包まれた一人の美しい婦人が、或祕密の家の前で自動車を止めた。彼女は意氣揚々と其家の闕を超えて玄關に入つて行つた。するとはからず、今しも玄關から出て來る一人の紳士と出逢ひ樣にぶつかつた。此紳士は實に彼女の夫であつたのである。

彼は好奇心を持つて妻の毛皮を開いて見た。すると驚いた事に、彼女の外套をまくつて見ると、彼の妻は殆んど眞裸體であつたと云ふ事ではないか。互ひに愼重な態度を保つ爲めに、此夫婦者は此事件に關しては祕密を守つたとの事だ。

又之もロンドンの事であるが、客が相手の女を選ぶ場合、室の女達を小さなシャツ一枚だけ著け、あと全部の著物を脱がせてしまふとの事だ。

又、ニューヨークの何處に糞眞面目な牧師さんがゐるか……

快樂を望んでやまぬ心は、アメリカの男女をして、思ふ樣婬蕩の氣分を味はしたでないか。ベルリンに就いては目下調査中であるから今は云はない。

善良な風俗の天國として知られるウインナ市はどうか。ウインナこそ佛蘭西金持連が滿たざる心を以て歡樂を求めに行く所ではないか。

こうして見るならば、佛蘭西以外に何處に貞節と、自由と、素朴の國があるか。

或外國の外交官が巴里で逸樂を試み樣とした。然るに案に相違して婬賣婦達の眞面目なのに驚いてしまつた。で、彼はそれを止めて、巴里人の餘りに不可解なのを非難したと云ふ事である。

職業女が一度男の友達を持てば、彼女は眞劍さと素朴さとを以て、自分の愛する男に身も魂も獻げるが、外國の娘さん達の樣に夜、公園などで身を任してしまふ樣な事はない。

彼女が一度戀人を持てば最早決して男に對して二心などは持たない。

實際職業女は他の國々の人妻よりも、自分の男に對しては忠實である。

「いやそんな事はない……」と云ふ人があるかも知れない、然り、若し彼女が男から瞞されたと知るや、必然的に男を瞞す事もある。

それは餘りに彼女達が卒直で公明であるからだ。不正直の男の傍にゐる女が姦通するのは、あたり前である。

女學生は戀人を持たない、彼女の高遠な自尊心は彼女をして墮落せしめるのを防がせて放埒を誡めて居る。

さて、今度は夫を裏切つた有產階級の妻に就いて一言して見る。

中世紀の頃、それは當時の文學の好題目であつた。それが爲め佛蘭西は外國に非常に誤つて見られてしまつた。

然し之も、此心理描寫をよく反省し、熟考して見るならば、この性的本能に對する欺瞞は必ずしも

佛蘭西女の氣質を表現して居るのではない事に氣付く筈である。

婦人を裏切りに導くものは、ほんの一時の感情の激發からであつて道德の腐敗より來るものでない。

我々の眞の巴里！　それは絶えず沈默の内に勞働し、新しき創造を工夫しつつあるものであり又、世界に藝術を與へる所のものである。此巴里の坩堝（るつぼ）には、全國民の智識と、立派な意志とが結合され、混交され、其等が一塊となつて、美と、善良と、均衡の大作品を生産する所なのだ。

凡ての不幸困難にも拘らず巴里は、永い間、バー・イジス（Bar-Ices）の儘でゐた。此イジスの小舟こそ、直感を司る幸福な女神であり、凡ての藝術、科學の母であつた。

此船こそ、あらゆる疾風逆流を物ともせず常に勇敢に浮び漂ひ、少しも失望、落膽しない所のものなのだ。

チ　ー　・　ワ？

チー・ワ？

「チー・ワ？」

と云ふ、とてもなめらかな響が、僕の耳の鼓膜を撲つた。と同時に、巴里ロージェ會社製の乳色丸形石鹸の催情的な匂がプンと鼻をかすめた。其處で、僕は「ハハン、知らぬ間に僕も一ッぱしの上海人になつたんかなあ」と獨りで感心した。所は……もうこれ以上書かなくとも、上海通の方なら、今僕が何處で何をしてるかと云ふ事は判る筈だ。が、讀者必しも上海通とは限らない。説明を加へやう。

先づ僕のスタイルを見てくれ給へ！　帽子は英國紳士好みの薄茶のステッドソン。スーツはトーマスで作らせたロンドン・スタイルの茶色ウーステッドに變りバンツ。クラバートとハンカチーフは勿論共色模様カラはぐつとくだけて、ソフトのタッチドカラー。靴は……と云つた案配で、アッシュのカーンを手離した事のない（尤もメリケン人は決して杖を持たぬが、メリケンが持たぬから、持つて

いかぬと云ふ法はないから、僕は斷然持つた）紳士であつた。……が、傳手だから容貌の方も御紹介すると、口髭のある、目のくぼんだ、額のはけ上つた、色の黑い、何んの事はない英國の伯爵が、印度から一昨日歸つて來た樣な姿だつた。と、僕自身は確信してるが、若し御不服の方があつたら遠慮は無用ですから、ドシ〳〵罵り下けて下さい。元値が切れてもかまひませんから。

元來僕たるや、これでも立派な日本人だが、而も牛乳の嫌いな甚だ鎖國的思想の持ち主だが、よそへ行くと、どうも色々の人種に見られる。尤も髭があるからと云つて、コールマンや、ギルバートに似てると云はれた覺は殘念ながらないが「オヤ、パグダッドの御旅行からいつお歸りになりました」なんて、突飛な質問を受ける事は度々あつた。

以上の如き人問は、上海にはざらにある。一體上海つて所は、氣取るなら、グッと氣取がよし、そうでなかつたらすべからく乞食式生活をした方が面白い。中間の堅造一方の巴里で云ふ所謂ブルジョワと云ふ平凡な生活は此の土地ではパッとしない。

で、先づ大體僕其の者の說明はすんだから今度は場所の說明をする。試に上海へ渡航したとして見給へ！　どうせ日本人である諸君は上海へ着いたら、虹口の日本宿屋へ落ち付くだらうから、まあ飯でも食つて、暫く休息してから、タクシでも賴んで、夜の十時頃から上海の銀座、南京路へ行つて見給へ。銀座程明くはないが、其の人出には、大低のほせて仕舞ふだらう。

ベラボー奴！　山の中で猪や猿と育つて來た人間じやあるまいし、人の顏を見て、逆上するつて奴があるものかと氣早な諸君は憤慨するかも知れぬが、其の人間の數と種類の多い事、とても並大低な事ではありませんよ。世界四十數ケ國の人間が、無茶苦茶に混合してるのだから、まるで畫家が仕事を終へて、パレットに殘つた繪具を、ナイフで掻き捨てる時、繪具がゴチャ〳〵に入り交る。丁度あんな案配だ。白もあれば、黑もある。黃も靑も赤も何んでもある。所が、畫家は時々、捨てる爲に掻き交じた混沌たる繪具の複雜な色彩に、何んとも云へぬ不思議な調和を發見して、其のまゝ、ナイフでカンヴスへなすり付けて見たい衝動に驅られる事がある。上海つて所は丁度そうした都市だ。世界中のあらゆる事物が、遠慮會釋もなく、ドロ〳〵と熔け込んで來て混亂の調和の魅力と云つた、甚だやゝこしいものを持つ樣になつたのである。こんな現象は抱擁力の無限大な支那でなければ見られぬ

所であらう。

畫家のパレットの混合繪具は、靜寂だ。其處へ行くと、夜十時頃の南京路では電車、自動車、人力、音樂隊、物賣りの叫聲、行人の話聲等々、まるで音響の渦卷だ。それに前申した色彩と光線のコーラスが共同戰線を張るのだから、大低太繩の樣な神經の持主でも始めの間は少々心細くなる。どうだ？アヤマッタか？

あやまつたら、其處等で自動車を降り玉へ。ホラ、こゝが南京路と浙江路との交點だ。御覽の通り、其の四辻の所に、永安公司、先施公司、新々公司と云ふ三ッの七階建のビルヂングがあるだらう。これ等がつまりデパートなのだ。

君は又、何んだつまらないと云ひたさうだな。なる程此の三ッのデパートは、規模に於て三越や松屋や松坂屋には遠く及ばない。けれども、所謂歡樂郷としての設備に至つては到底日本の百貨店が逆立ちになつても、追つつかぬ。

先づ永安へ這入つて見やう。いつもだつたら夜は店を開めて仕舞ふのだが、今晩は都合よく夜間の大賣出だから開場してゐる。如何にも三越あたりから見て商品も貧弱だし、設備も行き屆かぬ。店員も殆んど男許りで、無愛想な事夥しい。二階三階四階五階、の表側丈が、一階同樣のデパートで、其の裏側が、大東旅社と云ふ洋式の大旅館になつて居り、清潔奇麗な大料理店を持つて居る。日本で云つたら、三越の中へ丸の内ホテルを持つて來た位に思ひ給へ。それから六階七階が大變だ。天國でも一番上等なのを第七天國と云ふだらう。卽ち此の六階七階が、上海人……勿論支那人の事だよ……に取つて無上の歡樂の天國なのだ。

三越の上へ、丸の内ホテルを持つて來て、又其の上へ、淺草の六區を持つて來たとしたらどうなる？　それてザッツ・オールじやないか。六、七階にはあらゆる支那民衆の歡樂の對象が集められて居るのだ。新劇、舊劇、シネマ、講談、舊劇、輕業、手品等々、上海で有名な連中が、こぞつて出演する。その間玉突あり、覗き寫眞あり、賭博あり、飲食店あり、遊び事なら何んでもある。但しそれ等は完全に支那民衆のみの爲であり、他國人の事なんかちつとも考に入れて居らぬ所が面白い。

假に君が、虹口の日本旅館なんかへ宿らず下船して、すぐ此の大東旅社へトランクを投げ込んで、

室が定まつてから、一風呂浴びたとしたら、もう君は上海の心臓へどつかとお尻を据えた事になるのだ。それからは、四馬路の古本屋で石版刷りの和尚奇絵か何か買ふのもよからうし、幸ひ秋晴れの上天氣だから、靜安寺路でもドライブするか、或はフランス・パークへ美しい上海娘を見に行くもよからう、それとも正金銀行へ金を取りに行くか？　何んしろ上海つて所で、金を切らしちや、問題にならぬからな。兎に角夜の十時頃まで、見物なり、買物なりして時間を送り、愈々十時か十時半になつたら、此のデパートの入口にある昇降機に乘つて昇天するのだが、第七天國への入場料は小洋三十錢いるのだよ。

昇天してからは、何をやらうと君の御隨意だが、君、そんなにギョロ〳〵氣味惡さうに見廻しちやいけない！　前にも云つておいた通り、此處へは、外國人なんか殆んど絶對に來ない所だから、如何にも上海通の樣な顏をして悠然たる態度を取るのだネ。全く此の支那の匂はどうだ？　驚いたらう？　けれども、ぢき馴れて仕舞ふよ。此の無數の支那人の中へ混ぢつて、ちつとも目立たない樣にならなくつちや、面白い事は出來ぬ……まゝ、そんなに急くものぢやないよ。面白い事ていのは後で話す。

それより、あの舞臺を、一幕覗いて見やう。オット、席に掛けちや駄目だ。場代と、お茶と煮へタオル代を取られるからな。どうせ譯の分らぬ芝居だ。腰掛ける程長くは見て居られないさ。こんな所では倹約する事。使ふ場所はいくらでもあるんだから。

相變らずの人氣だネ。藝題は有名なものだから、既に御承知でもあらうが、例の「狸猫換太子」だ。支那人好みの勸善懲惡劇だが、これはいつ掛けてもきつと當る。筋はお家騒動物で、一人の愛妃が王子を生むと云ふ事になつたから、他の連中が惡計を用ゐて、王子と猫の子とを取り替へ、あの女は不屆にもこんなものを生みましたと、上へ奏上する。其處で逆鱗の結果、愛妃はお拂ひ箱になるが、幾年か後に王子が大きくなり、他の妾達の惡計が露見して、目出度し〳〵となる。頗る甘いものだが、支那の民衆は、斯うしたものを大變に喜ぶ。

いやはや、とても喧しい。壊れかかつたオルガンの中へ鼠を十匹追ひ込んだ樣だ。目も耳もでんぐり返りさうだ。まあこつちへ來給へ。輪投げでもやつて、煙草のケースでも取つてやらう。それともチーポツ？

大分君も疲れた様だネ！　無理もない。船から上つて、いきなり上海の心臓へ飛び込んで來て、ヂヤン〳〵見物したんだからな、まあ下へ行つてゆつくり支那式のベッドの寢心地を味つて見給へ。

と、したら、如何に銀座ボーイの君だつて、上海の便利さには驚くだらう。何にしろ、七階建の一ツの箱の中に、ピンからキリまで、何もかも揃つて居るのだからな……

以上は今日上海丸で着いて、其の足で上海の心臓へ飛び込んで來た、とてもテンポの早い友人を案内した順序だが、今度は前に返つて、虹口の日本旅館から、一緒にタクシーで南京路と浙江路の交叉點まで來て、下車した友人を案内せねばなるまい。

君、君もあまり周囲を見るのは、よし給へ。上海に十年も居た様に、どつしりと歩いてほしいネ。ネラ、印度巡査の手が上つた。Go! だ。向ふ側へ渡らう。

オイ〳〵、そこらに並んで居る女の顔を見ちや駄目だよ。早く來給へ。御覧の通り、此の先施公司も、前の永安と、歓楽場、ホテル、料理店と皆同じ形式だネ。尤も設備はこちらの方が多少新しくて廣い様だがネ。此の左隣にある新々公司も規模は一番小さいが、機能は永安、先施とすつかり同様だ。

さて、場所の説明がとんでもなく長つたらしい物になつて御退屈だつたでしやうが、愈々これから「チイ・ワ」と云ふ聲と、ロージェ會社の乳色丸形石鹸の匂とで、僕が「ハハン、知らぬ間に僕も上海人になつたんかなあ」と感心したと云ふ段取になるんだからも少し我慢して頂き度い。オヤ君はまだ居たんだネ？　甚だ失礼だが、もう君には用事はない。これからの登場人物は僕一人で結構だから、道を間違へぬ様にして、タクシーで宿へ返つてくれ給へ！　と、此の友人を虹口の旅館へ送り返して僕一人になつた事にして置く。

其の晩、星がよく光つて、空氣が馬鹿に爽かで、何んだか無性に高い所へ昇り度くなつた晩だつたので、永安公司の七階へ行つたと思ひ給へ。相變らず寄せ鍋の中で、ガンモや八ツ頭や、スヂや玉子なんかゞ、煮えくり返つて居る雑踏だ。僕の服装は、前申した様に英國式にリューとしたものだが、一向周囲の支那服の先生方と不調和を感じない。

何分其の晩は高い所へ昇るのが目的でやつて來たので、屋上のベンチに腰を下して、只ぼんやり、明暗高低甚だ不揃ひの市中を見廻して居た。全く上海の街は變なもので、眼下に見下す大馬路の有様

は、玩具箱を引つくり返した樣な騷だが、一度其の裏町へ目をやると、不潔なゴミ〳〵した支那家屋が、暗々たる地面に、吸ひつく樣にへたばつて居る。其の又向ふは、大世界を中心にした佛租界の盛り場の、藥品や煙草の廣告のイルミネーションが、星の光を奪つて煌々と輝き渡つて居る。蘇州河向ふの虹向の方面は一體に暗い。斯樣に明暗、貧富、清濁其の他、どんな相反する物でも、一緒くたに包容して仕舞ふ所が、如何にも上海らしくていゝな、なんかと變な考に耽つて居る時、耳元で「チー・ワ？」とロージエ石鹸の匂だ。

其處で今度は「チー・ワ？」の說明だ。「チー・ワ？」とは「去否」と書く。譯すれば、「行くか？」と云ふ事になり、更に「行かない？」「行きませう」と變化する言葉だ。

これは別に變な言葉でも、不思議な言葉でもない。普通上海人が使用する言葉だが、場所と時間と、使用者とによつて、忽ち特別な意味になつて仕舞ふ。では、其の特別の意味とは如何？　と開き直られても、結極「行くか？」「行かない？」「行きませう」になつて仕舞ふ。弱つたな！　どうも僕がいくら弱つても、これ以外の意味にはならぬのだから始末が悪い。だが、諸君！　僕が諸君に「行くか？」と云ふのと、女の子が諸君に「行くか？」と云ふのでは、同じ「行くか？」でも大に違ふ所があるでしやう？　つまり其處なんだが、其處へ行く前にも一ッ云ふ事がある。

定めし、諸君は、上海に野雞と云ふ特產物のある事は御存知でしやうな？　野雞を「ヤチ」と讀む事も多分御承知でしやう。そうなると話は早い。要するに支那娘の淫賣ですネ。僕をして云はしむれば、上海はこれあるが故に、重大なる一風景を世界に誇り得るわけだ。

上海の娘は南方美人鄕の素質と、シイクな各國美人からの影響とで、東京あたりでは見られぬ、不思議な調和を持つた尖端的美を發揮してゐる。

嘘だと思つたら、春の麗かな日か、夏の颯爽たる朝か、秋の朗らかな午後に、佛租界のフレンチ・パークに行つて見るがいゝ。其處で素晴しい現代的な上海娘を、ふんだんに見られる事、受け合ひだから。

そんなら上海娘は皆美人か？　なんかと皮肉られてはかなはん。もとより玉石混交で、いゝ方より悪い方が多量である方は、どうも現世のならはしで致し方ない。

近代支那の一異彩勇敢無雙な女學生の連中は議論倒れで、美しいのは少い。深窓の貴婦人令嬢達は、普通のエトランジェとは没交渉だから、いくら美しくても高嶺の花だ。結極女優、藝者、淫賣達が美しい。

女優、藝者に美しいのがある事は言をまたぬが、其の數に於て淫賣即ち野雞とは到底比較にならぬ。其の上他國人の僕等にとつて、高慢な女優藝者へ手を出す事は、龍の顎から、玉を取り出すよりむづかしい仕事だ。

其處へ行くと野雞だ。數が殆んど無制限と云ひ度い程多い所へ、中での優物になると、女優藝者の壘を摩するものが澤山ある。尤も野雞には種類が多い。一等から五等、六等……下級へ行けばきりがない。

一等野雞（別にこんな等級が、上海當局によつて登錄されてるのではないが）この連中こそ、僕達エトランジェが覘ふ絶好の獲物だ。も一寸大袈裟だが、兎に角彼等一等野雞達こそ上海をして巴里と共に東西二大淫賣都市の名聲を噴々たらしめて居る、第一の要素なのだ。

僕の分類法によると一等野雞を二ッに分つ。

(a) 抱主を持たず、自分一人の獨立營業で、而も野雞をもつて專業とせず、勝手な時に、都合のいゝ客丈を取る。お妾などが旦那の留守に、小遣ひ取りにやるのなんかは、此の部類に屬してゐる。

(b) 抱主を持つ純粹の野雞の中で、最も優秀なもの。

ではこれ等(a)(b)級の高級野雞は、どんな所へ出没して、どんな具合にお客を取つて、どんな所へ連れて行くかと云ふと、ここん所大切だから、よく聞き給へ！

先づ(a)級の方から説明すると、これは五〇%は自由だから、鳳の如しとまでは行かぬが可なり自由を享有して居る。從つて白晝でも堂々と、公園、劇場、盛場等へ出張する。そして、おもむろに色餓鬼共を物色するのだから、客種も勢、よくならざるを得ないと共に、客を選擇する事に於ては、極度にまでフリーだ。然るにだ。時として僕達東洋人（トンヤンニン）即ち日本人が八百萬神の御神德によるのか、どうかは知らんが、此の(a)級野雞の撰擇にあづかる光榮を浴する事がある。

其の理由。

(一) 日本人はスケベイでアマいが、あまりシッコクなく、金離れが存外いゝ。
(二) 金離れのいゝ日本人は、大低旅行者だから後腐れがない。
(三) 支那人の客をとると、旦那に露見する可能性が多い。
(四) 異人さんは嫌だが（彼女達の間にも存外、「降るアメリカに袖は濡らさじ」主義が盛んな様だ）日本人の上等の所なら、自分達の旦那と、肉體的構造に於て、大して違はない。

何んと其の道の猛者を以て任ずる日本人諸君！　たま〳〵右の如き素敵な野雞を射落して、或は引つかけられて、彼女の家なり、高級な支那旅館なりへシケ込んで、以下よろしくあつたのを、ウヌの縹緻や手練で、モテたものと夢々思ふ事勿れ！　いくら己惚れの強い先生でも、右の四ケ條をつきつけられちや、目が醒ずにや居られぬだらう。

次は(b)級。

(a)級は一種の變態だ。野雞通になれば、そんなものを覗ひたがるが、一般普通の旅行者には(b)級が一番よろしい。最も手取早い方法は支那の大旅館へ一晩宿泊する事である。一人では心細いから、三人位で、例へば永安公司内の大東旅社へ行つたとする。室が定まつて、阿倍仲麿とか何んとか出鱈目の宿帳をつけると、番頭が、「では、御ゆつくり御休みなさいませ」と云ふのと、ちつとも違はない程の當然さをもつて、「先生、娘々（ニヤンく）入らぬか？」と聞く。勿論上海には十年も居る樣な顏をして、「不用々々」と追つ拂つて仕舞ふ。すると入れ違ひに日本人係りの蕫先生とか何んとか云ふボーイが悠然とやつてくる。そして舌ッたらずの日本語で、番頭に世話させると、コンミッションを取られるから、私にまかせなさい。いゝのを連れて來ませうと、頭からきめてかゝる。そうだらう一流の支那宿へ御携帶なしで來た客が、一人で寢ると云ふ事は、各室のダブル・ベッド及び二ッの枕にかけて、南京政府の法律以上の不文律によつて嚴禁されて居る所だから。

其處でまあ、諸君は潔ぎよく、蕫先生に一任してしまひ給へ。任して仕舞つたら、用事はないのだから、交り替りお湯にでも這入つて、さつぱりして部屋へ歸つてくると、……所で部屋だが、ありふれたテーブル、イス、洋服ダンスに鏡臺、ソファが、普通のホテルの部屋の通りに、普通に置いてあるが、寢臺丈は珍物の別誂へだ。廣い支那式のダブルで、枕が二ッ、四隅に四本柱が立つて、それに

天竺木綿の白幕が張つてある。樣つたさうな顏をして、此の變裝を見學してる所へ、又董先生が、悠然と三人の娘々をつれて這入つて來た。

見た所、十七位から十九迄、顏こそ各人各說だが、姿はどれもこれもシイクな上海服を着て居る。蕗臭かつたり、南京蟲が居たりしたら代價無料と云ふ代物で、間違ひなく絹のペチ・コートをつけて居る。

やがて一ト通り三人の展觀が終ると、董先生が、諸君を一人々々捕へて、「あなた、どれに惚れます？」と、實にも素晴しい日本語をあやつつて、單刀直入的に質問する。だから諸君も、禮儀として卒直に惚たなら、惚れた。惚れなければ、惚れないと云つてやらねばならぬ。

例へば三人の內で、二人は氣に入つて定まつたとして、一人が氣に入らなかつたら、其の事を遠慮なく云へばいゝ。其處は支那式で、賣り物はそつちのもの、金はこつちのもの主義が氣持よく徹底してゐる。董先生、別に氣の毒な顏もせず、賣れ殘りに退場を命じ、更に一人の候補者を呼んで來る。呼んで來ると云つても別に遠い所まで行くのでない。前に說明した第七天國へ行つて、よさゝうな天女を連れて來るか、電話で一寸呼び寄せればいゝのだから、時間はものゝ十分とはかゝらぬ。

右が一等野雞の(b)級に接する最も正確にして簡單な方法だ。と云ふと、先ツ走りにして、鋭敏獵犬の如き諸君は、なら、あへて董先生を煩はさなくとも、三十錢の入場料を奮發して、勇敢に第七天國へ昇天して、これはと思ふ天女を物色すればいゝじやないかと、今度はブルドックの如く食つてかゝる方々もあるかもしれないが、そはまことに猪突の勇と云ふ奴で、大膽不敵な暴擧であるのである。

其故如何と申しますと、なる程、此の第七天國への昇天料は銀貨三十錢也で、甚だ安値です。且つ停車場の貨物昇降器の樣なリフトで七階迄せり上れば、眼前忽ち天國を現出して、天女は花の如く咲き亂れ、鳥の如く囀る光景を拜む事は出來ます。或る人に云はせると入場者の一割は、天女だとの事ですが、それ程はなくとも、それ程だと思ひ度い位、澤山居る事は確だ。

然し親愛なる日本人諸君よ！

諸君は一人で、或は二人で、或は三人で……この雲の上なる別世界まで昇つて來る勇氣がありますかッ？　此の世界の歡樂者が、絕對的に支那人許りだと云ふ事を御存じですかッ？　諸君と御交際願ッ！・ッ？

へる樣な日本人紳士は在留邦人名簿にかけて、誓つてこんな世界へ顔出ししない事を御存じですかッ？

マ、假に諸君が如上のオブスタクルを、斷然一蹴して、大和魂雄々しくも、此の天國に昇天したとして見やう。所が出口も、入口も、便所だつて、仇やおろそかでは發見出來ぬ、此の歓樂天國。支那人、支那人、支那人……異臭、惡臭、白蘭花の香、巴里ロージエ石鹸の匂。騷音、ドンガン〳〵金、銀、赤、青、黄、綠、黑、白が亂舞する色彩の渦卷。お茶と、絞りタオルから發する湯氣、濛々と寄せ鍋を包む、味を持つた白煙。中賣り共の叫聲。星を燒く電飾の炎上。無慘や大和魂がジヤン〳〵と目を廻す事受け合ひであります。

所で、も一度假に、諸君が、無理々々大和魂を臍下丹田と云ふ窮屈な所へ押しつけて、曇り勝ちなる双眼にツワイス十二の玉を當てがひ、ざつと場内を見渡せば、けに〳〵綾羅錦繡を身に纏ひ、花の顔ばせいやコケトリーなる墮天女がウジヤ〳〵居る。

だが、諸君！　かゝる墮天女と、普通善良なる家庭の夫人、令孃乃至は、女房、娘を如何にして區別をつけ得るや？　若し間違へて良家の令孃の袖でも引いたとしたら、何んとなると思し召す。恐らくは爲の二十一ヶ條問題に對する排日以上の騒が持ち上る事は覺悟の前でなければならぬ。尤も、凡そ野雞と云ふ者は、必ず慾の皮が木綿の着物を着た樣な、不愉快至極な婆さんを、女中衆護衛衆交渉係として帶同して居る。だから、美しい娘が、醜い婆を連れて居たら先づ墮天女と見て差しつかへないが、最上等ロース級の野雞は、好んで單獨でやつてくる、それに良家の婦女だつて、右御同役と云つた樣な婆さんを連れて來る。從つて娘プラス婆イクオール野雞と云ふ式は常に成り立たぬ。だから最初の内、どれが野雞、どれが素人と見分ける事は、吾々外國人にとつて、到底はかなき努力とならざるを得ないのだ。

然し！　と諸君の内で强情な方は云ふかもしれない。然し、向ふも商賣だから、思ひ自ずと現はれる、こちらの樣子を見たら、如才なく擊位はかけるだらうと。所が諸君、甚だ御生憎樣だが、高等、(A)(B)級の野雞は、何んぞ一見の東洋人諸君如きに言葉をかけやうか？　そんな事でもしやうなら、彼女達の野雞道が廢つて、面子に關するのだ。諸君が如何に强打者であつて、見事にヒットし樣と身

構へた所が相手はウエスト・ボールばかり投げて寄越すので、ヒットにも三振にも、てんでバットをふる事が出來ぬと云つた狀態、これを齒に絹着せず、云つてのければ。彼女達は諸君なんか相手にしないのだ。斯くなる上は、いくら諸君が大和魂に、日本神國主義を褌十字にあやどつて力んで見た所が、とんと始まらぬ話じやありませんか。

すると又、此處に一向人見知りせぬ方があつて、けれども僕が四馬路の青蓮閣（チンレンコン）へ行つた時なざあ、忽ち包圍攻撃を喰つて、帽子を取られたし、其の翌晩は四馬路の雜踏で、先夜の娘々（ニャンニャン）に追つかけられて今度はネクタイを取られたなんかと得意氣に自分の色男振りを宣傳なさるかも知れないが、これは御氣の毒樣だが僕の今の話とは、少々緣遠い。

如何んとならばだ。元來四馬路青蓮閣へ出沒する連中は、三流乃至四流であつて、敢て諸君の如き美男子でなくとも、東洋（トンヤン）、スケベイ、一發々々。を連呼歡迎し、卓上のお茶及び西瓜子を遠慮なく平けてくれる連中なのだ。かうした青蓮閣の野雞や、虹口の廣東ビー並に、上海の裏面に咲く暗黒の花を代表する、妖しくも美はしき墮天女達を取扱はうと云ふ樣な唐變木には、二人の介添人を送り度い程、僕、大なる義憤を發せざるを得ないのである。

上海に於ける一流野雞が、毎晩客引きに集まる中心地は、シネマ、劇場、ダンス・ホール等を除き左の四ヶ所と思へば間違ひない。即ち大馬路の永安、先施、新々三ビルの階上花園及び佛祖界の愛德華路（ルロ）と敏體尼蔭路（センテイニイロ）の交點にある大世界の四天國である。

だがこゝ等へ出動する野雞達全部が一流であると云ふ事は勿論ない。其の内のごく少部分が一流であとは皆二流以下である。然し三流以下になると、もうこゝ等へは來ない。何故なら、此處へ來るには彼女達と雖も、入場料が入る。尤もよくしたもので、彼女達が來る爲に連夜大入滿員である、こゝの經營者は拔目なく、野雞達に割引のバスを發行してゐる。が、これは二流以上の連中の事であつて、三流以下になれば、例ひ割引されて居るとはいへ、入場料を出して毎夜來る程の力はないから、四馬路裏の巢窟で網を張つて、迷ひ寄る虫達を待ち受けるとか、大馬路のデパートの煌々たる飾窓の前に陳列して、或は勤務中の巡警と喋々喃々し、或は甘（ママ）さうな通行者の前へ、突然足を出して躓かせ、躓く足が緣のはし、とか何んとか口實を作つて同行を强ひるとか、深夜の街を、さまよつてフリー・ラ

ンサー式の面目を遺憾なく發揮するとか、といつた樣な有樣だ。

上海へ遊びに來た……と云つて惡ければ、視察にお出になつた日本人諸君で、特に上海通の友人でも案内してくれる人は格別、そうでない人が普通の案内者につれられて、夜の冒險を試るはの、大抵三流以下の、南京虫の活躍華やかなりし、支那家屋の二階の一室であつて、長崎へ着いてからも、口紅の跡ならぬ、南京虫の跡消えやらぬ、甚だ痒痛み入る風情の一夜で、あつたと相場が定つて居る。

威勢のいゝメリケンの水兵達が、黄包車（ワンポウ）の上で、足踏して、パオー、パオーと怒鳴りながら突貫する、四流、五流の代物になると、不潔と、病毒と、醜惡とで、到底吾々日本人には手が出せぬ。だから内地に於て尊敬されつゝある旅行者諸君は、如何なる譯ありと雖も、三流以下のものと、貴重なる諸君の數時間或は一夜を過す事は、絶對的に止めた方がよろしからうと、領事館に代つて御警告申し上げて置く。

よろしい。僕も日本の紳士だ。君の勸告に從つて、今後斷然安物買ひは止めやう。然しだネ、なる程彼女達を一品香だとか、大東旅社だとか、新々旅社なんかの大旅館へ、呼び寄せれば、わけはなく且つ安全さ。だが、も一度然しだネ、それでは、上海的なあまりに上海的なと云ふ、眞の味は味へまいじやないか、云々と突き込んで來る具眼の士なきにしもあらず。責任上左に明答を與へて置かう。

然り。お說の通りだ。旅館なぞへ呼んだんじや、眞の醍醐味は分らない。矢張り、苦心サンタン、自分で發見して、交渉して、成功したんでなければ、本當ぢやない。

では、假に諸君が、永安の七階で、これはと思ふ墮天女を發見したとする。そして向ふ見ずに、いゝ加減の上海語で（一流の野雞には英語や、日本語は通じない。反つて三流以下の連中には、よく通じる事がある）何んとか交渉めいた事を云つた時、オーライと相手になりに來たら、お氣の毒だが、そいつは二流以下だ。若し一流だつたら、鼻の先でフンと冷笑して、流石に銀座街頭に、其の人ありと歌はれた、諸君のモボ振りを尻目にもかけず、サッ〳〵と行つて仕舞ふ。

そんなら、吾々外國人は、絶對に一流の連中と直接交渉をつける事は出來ぬかと云ふと、必しもさうでない。要するに、運と根とですな。そうした歡樂鄉へ、毎晩根よく通ひつめる。それこそどの野雞が、どの隅の、どの椅子に腰掛けると云ふ事まで、知りつくす位。さうなると、彼女達も、其の他

の入場者達も諸君が他國人であると云ふ、目障りの意識をだん〳〵無くして行く。初めの内は、水の中の油一滴だつたのが、知らぬ間に、水の中の一粒の水になつて仕舞ふ。それからは運次第だ。

これから、僕が如何に其の運に惠まれたかと云ふ御話をするんだから此の文章の前へずつとさかのぼつて、私が「チー・ワ？」と云ふ聲を聞いて、「ア、、僕も知らぬ間に一ッぱしの上海人になつたと見えるな……」と嘆息した所まで、も一度引つ返して貰はう。

とに角僕はさう思ひながら、振り向くと、「運の奴め」が十四位の小娘に化けて、此の意味深き「チー・ワ？」と云ふ言葉を發しながら、僕の上衣を引つ張つてるのだ。僕は此の「運の奴め」の頭越しに向を見た。

人々はフォックス・ニュースの實寫物に見入つて居る。其の後ろのコンモリと茂つて居る植木の蔭に「運の奴め」の御本尊が、ッンとすまして立つて居た。

これは異常な成功だつた。僕は此の時、初めて、第一流の墮天女と、直接口をきく機會を掴つたのだ。最初僕の袖を引いた十四の小娘は、彼女の妹分であつて、其の命を奉じて、僕の爲に運の神の使女の役を演じてくれたのである。暫くあつて僕等三人は、何んの交渉も持たぬ人間の樣に、離れ〳〵になつて、此の騷擾の天國から下界へ降りて行つた。

僕の第一夜の冒險談は、あまり長くなるからこの位の所で、一とまづ打ち切つて置く。それから其の晩どうしたつて？　大きにお世話だ。そんな事を紳士は聞かぬものですよ。「アラ・プシヨタ」（私は知らない）だ。

チー・ワ？

大世界の貴女

大世界の貴女

一

9月3日 火曜日 (晴)			
摘要	收入	支出	残高
美雅夕食(二人)		5.50	
四馬路マヂ黄包車(二人)		.20	
男女大魔術		.60	
性史(三册)		1.50	
牡丹燈		.30	
青蓮閣茶代		1.00	
猥寫眞		2.00	
大世界入場料(二人)		.60	
玉突		1.00	
パクチ		3.0	
一杯呑ム(二人)		4.30	
タクシ		1.30	
		21.30	

變なものを御覽に入れるが、これは、僕が上海へ着いた三日目の出納簿の一頁だ。何んしろまた西も東も分らぬ僕を、上海通の石田が、いきなり、上海歓楽街の中心へ、引つぱり込んだのだから、當夜の事なんか混亂して仕舞つて、今から回想して見ても殆んど覺えて居ない。

だが、此の出納簿を見ると、歴然と二ッの記憶が蘇つて來る。其の一ッは、僕達が四馬路の本屋で支那の秘本を買つたり、立ちん坊の寫眞屋から、面白い寫眞を賣りつけられたりしてから、例の有名な茶館青蓮閣（チンレンコン）へ登つた。青蓮閣がどんな所かは、上海の事を書いた本には、必ず出て居るから、省略するとして、とに角二階へ上つて見ると、いやはや居る〳〵、弱氣の僕は完全にノック・アウトされた形だ。漸く石田の斡旋で一卓子を占めると、見る〳〵野蠻連の包圍を受けて仕舞つた。僕は内心どうなる事かと心配してポケットの財布を押へた位だつたが、これもどうやら石田が追つ拂つてくれたので、僕等二人に二人の相手と云ふ事になつた。尤も始終他の連中もやつて來て、お茶を呑んだり、西瓜子をつまんで、お喋りして行つたが……

もと〳〵僕は遊ぶつもりはなかつたのと、物凄い女達のお喋りに參つて居たので、充分注意して見る事はしなかつたが、女達は皆な何だか相當美しい樣に思はれた。殊に僕の隣にへばつて居る娘なんかは、餘程これなら遊んでもいゝなと思つた位だつた。

石田は例の悠々たる態度で、ニヤ〳〵娘達と話をしてゐる。僕の顏を見ながら、キャッ〳〵と娘達を笑はせる。どうせ僕の惡口を云つてるのだらう、僕は言葉がさつぱり判らぬので、堅くなつてると僕の相方が、とてもヒドイ日本語で、こゝには書けぬ樣な猥褻な事を喋り始めた。いづれ日本の船員かなんかと敎へたんだらう。

思ひ出すと滑稽だが、あの晩はどうしたものか、餘程臨病だつたと見えて、長つ尻りの石田を引つ張つて逃げ出さうとすると、サア女が承知しない。いきなり僕の帽子を引つたくると、あれ〳〵と見る間に手から手へ渡つて、どこかへ隱されて仕舞つた。腹が立つやら、閉口するやら、全く散々の體で、なんだか人生が味氣なくなつた。

だが、これも石田が口をきいて、明晩きつと來ると云ふ言質を與へて、やつと娘達を承知させ帽子と身柄とを釋放して貰ふ事が出來た。そして、

「スケベイ、又お出で！」

と云ふ素晴しい言葉を、あびせかけられながら、大汗になつて、漸く街の雜踏へむぐり込んで、ホッとした。

「ヒドイ所へ連れてつたな！　あいつらあ、あれで何流なんだい？　相當いゝのが居るじやないか？」

「君のやつがネ、……云つてたぜ」

「ハハン、それであんなに僕の顏を見て、笑やあがつたんだな。巫山戯た畜生だ！」

「何に、あいつらあ、あれで第三流以下さ。これから君に第一流つて奴を、おがましてやるよ」

「又、あんな所なら今晩は御免蒙り度いネ。（スケベイ、又お出で！）てやあがつたが、あの日本語には吃驚したぜ。誰があんな事敎へるんだい？」

「あそこらは船員なんかゞ、澤山行くからね。だが、今から行く所は、日本人なんか、かけらも居ない、純粹な支那人の歡樂郷さ」

僕等はこんな事を話しながら、四馬路の人ごみを拔けつくゞりつ、暗い細い支那町をウネ〳〵通つて、佛租界の方へ歩いて行つた。

大馬路と浙江路との交點の一帶が南京路に於ける歡樂郷の一中心だが、共同租界と佛租界の境界線のエドアール大路に面した所に、も一ッの歡樂郷がある。それが大世界で、「ダスカ」と發音されてる。やがて僕等二人は、南京路から見ると、一層暗い歡樂を思はせる、此の大世界の入口まで群集を分けて辿りついた。

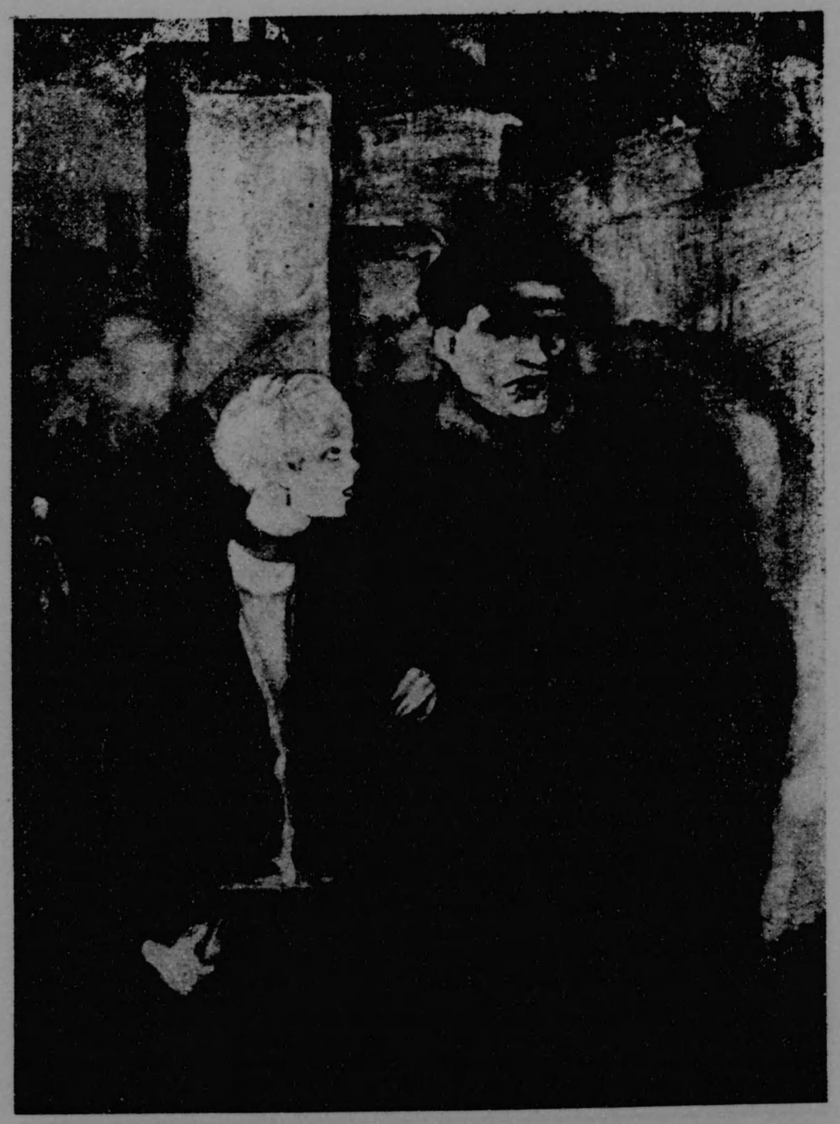
二

此の大世界は、丁度南京路の永安、先施、新々の屋上花園と同じ性質の歡樂郷であるが、永安等はデパートの屋上にあるのに、大世界は二階建のバラック建築である代りに、全然歡樂郷以外の何物も含まれて居らぬのである。永安等より一層支那式で、味が深い。そしてより暗い淫樂を思はせる所だ。

僕は既に、永安の屋上のすざましい有樣は、上陸の當夜、石田に引つ張られて行つたから、知つて居る。然し今、此處へ來て見ると、感じが又違ふ。何んだか、此處へ來る支那人は一層本當の支那人

らしく思はれる。これは南京路だと、日本人は見えなくとも、支那人以外の外國人を無數に發見する事が出來るから、自然自分丈が外國人ではないと云ふ氣持ちになつて、幾分氣が樂になれる。所が大世界の近所になると、全然支那人ばかりだ。いくら見廻しても、日本人は勿論、西洋人さへちつとも見かけない。此處へ來て始めて本當に自分達は異國人だなあと云ふ心細さをしみ〴〵と感じさせられた。そんな事はないのだが、何んだか、周圍の支那人が、こちらをヂロ〳〵見てる樣な氣がしてならぬ。云ひ知れぬ壓迫を感じざるを得ない。僕は前の青蓮閣では、只わけもなく參つたが、此處へ來たら、要心せねばならぬと云ふ樣な、警戒心が獨りでに出て來た。これは僕の心持だつたが、石田は一向平氣の樣だつた。入場料小洋三十錢づゝ出して這入る時なんか、まるで親類の所へでも行つた樣に札賣りの男と冗談口をたゝき合つてた位だつた。僕も氣を取り直して石田の左により添ひながら、かなりこわ〴〵と云つた有樣で場内へ這入つて行つた。

中へ這入つて、すぐ左の暗い舞臺では、手品かなんかやつて居た樣だが、其處を素通りすると、廣い前室があつて、其處には例のバクチや賣店や飲食店や玉突なんかが、ゴタ〳〵と喧騒を極めて居る。



下層戀愛

森の女達

それから僕は石田に案内されて、とに角場内を一巡して見た。どの舞臺も、どの舞臺も、大低滿員だつた。然し、それが何をやつて居ると云ふ事なんかは、勿論分つた物でない。只呆然と見て廻つたに過ぎない。一階と二階とをぐるりと廻ると、永安や先施の屋上花園よりは廣い樣だ。相當に草疲れた。それにまだ場馴れぬ僕は、無數の支那人にヂロ〳〵見られるのと、あの雲やかましい樂器の音に、大低うだつて仕舞つて、暑苦しくつてやり切れない。

「オイ、どこか休む所はないかい？　大分疲れたよ。」

僕は意氣地なく弱音を吹いて仕舞つた。

すると、今迄便所の側にある一室で、詩の文句を當てるバクチに夢中になつて居た石田も、氣がついたと見えて、例のニヤ〳〵笑をしながら、

「無理もないて……一寸刺戟が强過ぎるからな……ではト、どつかで一ト休してお茶でも呑まう」

で、二人は中庭へ出ると、其處には馬蹄形の廣い廊下があつて、ベンチがズツと置いてあつた。僕と石田とはその内で空いてるのに、やつと腰を下した。するとお茶屋が、すぐ熱い絞りタオルと、お

茶とを持つて來た。僕は呑めもせぬに四馬路で石田につき合つて呑んだ老酒のたたりと、人いきれの爲に、非常に咽が渇いて居たので、いつもなら穢らしい樣な、此のお茶が大變うまかつた。

後で分つた事だが、今僕等の休んで居る所は、場内でも一番奥の方で、此の廊下の後には、小暗い植込みがあり、その植込みの向ふには、いつも滿員の大小二ッの舞臺があつて、此の歡樂でも一番の人氣を集めて居る樣だつた。

僕達はお茶を呑みながら、目の前を、ゆるり〳〵と通り過ぎる支那人達をいゝ氣になつて品評し始めた。特に石田にしては、僕に一流の野雞を見せると云ふので、二の足を踏んで居た僕を引つ張つて來たんだから、綺羅を飾つた女を見る度に（それが又あまりに屢々過ぎる位、女の入場者が多い）どうだ〳〵と僕の尻をつッ突いたが、僕には石田の云ふ事が全部は信用出來なかつた。

何故なら、石田が敎へる女は、どれもこれも場内で、最も美しい、最も立派な連中許りなので、いくら一流とはいへ、高が淫賣がと云ふ先入主があつたし、初めての者には良家の婦女と野雞とは區別が絶對につかないと云ふ事を聞いて居たから、今石田が云ふ女が皆淫賣だなんて事は到底信じられなかつたのである。それに僕としては、此處へは初めて來たのだし、此の中庭には所々にアーク燈がついてゐる丈で、かなり薄暗いし、周圍の舞臺からは、幻怪味を帶びた支那音樂が、程よく緩和されて心地よく聞えて來る。歩き廻る女達は、金銀赤青等の思ひ切つた色彩の支那服を着て居る。薄暗い所で見る顔立は馬鹿に整つて白い。かゝる周圍の事情が、頗る僕をファンタスチックな世界へ、惹き入れるに都合よく出來上つて居る。それで僕も石田が指す女達を、なる程美しい者だとは感心したが、何に此の次來て、よく見たら大した事もあるまいと云ふ氣があつたので、いゝ加減の生返事をして居たのである。

所が、フト僕が後の植込の方へ、振り向くと、二人の女がこちらへやつて來るのに目がついた。一人の大い方……と云つても五尺二寸位で、女としては理想的の高さだが……は眞紅の地に金絲で、花模樣を縫ひ取つた、素晴しい衣服をつけ、踵の高い靴を、すつかり履きこなして、まるでフランス娘の樣に、自然に氣取つた態度でスッ〳〵と歩いて來る。髪は勿論バブで、眞中から分けて、そのまゝオールバックにして居た。支那人獨特の溫い黄味がゝつた白い顔に、淡い眉が匂ふ樣に長く引いて、

其の下にぱつちりとした、二重瞼の睫毛が、黒々と瞳を包んで居る。鼻は支那人に稀らしく正常な恰恰を保つて、紅もつけぬに、赤々と潤んだ唇の隅に、如何にも高慢ちきな微笑を隱して居た。

も一人の方は、年頃は二ッ三ッ下で、十五六位に見えたが、濃い青の地に銀絲で模樣を織つた、これも目のさめる樣な着物を着て居た。背も一寸低く、顏立も子供らしい無邪氣さであつたが、其の美しさは、いづれを上とも判じ兼ねた。全く此の二人が連れ立つて歩いてゐる樣は、斷然壓倒的な美觀で、日本に留學してゐる變な支那女學生ばかり見なれて居る諸君達には、到底想像を許さぬ程のものであつた。

お恥しい話だが、僕は思はず腰を浮かして、立ち上らうとした位だつた。するとどうだ！　此の美美す可き二人の上海娘は、所もあらうに、僕等の腰掛けて居るベンチから、二間も離れて居ない、筋向への椅子に腰を下して仕舞つたでないか！

勿論此の時は、石田もすでに女達に氣がついて居た、そして如何にも困惑した樣な目で二人の娘をヂッと見詰めて居た。すると向ふでも小さい方の娘が、おつぴらに僕等の方を、チョイ〳〵見ては、何んだか大きい方（多分姉だらう）へ喋べると大い方はさも無關心な樣を裝つて、廣場に背いて居た。

斯うして文章にすると、此の場面が、如何にも何んでもない樣に思はれるが、實際はどうして、張り切つた弓弦のやうに緊張して居た。僕達は勿論十二分に、此の二人の娘に興味を持つた。また向ふの二人も、後から思ひ合はすれば、あの時、相當に異邦人である僕達に何等かの關心を持つて居た事は否定出來ぬと信じる。

三十分許り斯うした息づまる樣な對峙が續いた。其の間二三の立派な支那人が、此の娘達に話かけやうとしたが、娘達はさも〳〵輕蔑し切つた樣な冷笑を浮べた丈で、てんで相手にならうともしなかつた。

僕は石田をつゝいて、若しあれが野雞なら何んとか話かけろとせついたが、流石の石田もすつかり堅くなつて自重して仕舞つた。上海通の彼にして見れば、此の娘達が良家の令嬢だつたら、もし下手な事でも云はうものなら、とんでもない事になるのを充分知り切つて居たから、仲々口が切れなかつたんだらう。

其の内に、時は徒らに過ぎ行く。娘達はヂロリと不可思議な一瞥を、僕等の上へ投げかけて置いてそのまゝ後をも見ずに、表ての方へサッ〳〵と行つて仕舞つた。それで僕はすつかり肩の荷が下りた樣にホッと溜息をついた。

「オイ！　あれや何んだい？……」

僕は千萬言も一度に聞き度かつたのだが、結局こんな一言より、咄嗟に口から出なかつた。

「サア……」

と石田もゴックリ唾を呑み込んだ。

「素晴しかつたネ。流石の僕も甲を拔いだ。正體とても分らんネ。僕は時々此處へは來るが、あんなのを見たのは今晩が始めてだよ。とても野雞とは思へぬね。第一あの支那人の男達をつッ離した態度を見給へ。野雞ならあんな事はしないよ。君はあの時、何んとかしろと云つたが、流石の僕も顏敗がして、とても口を切る勇氣が出なかつたネ」

「ウン、全く僕もあんなのが居るとは思はなかつた。それにしても何んとか正體を知る方法はないかい？　後でもつけやうか？」

「イヤ、後をつけたつて、あれが野雞でなければ何んともならぬし……と、待ち給へ。いゝ事がある。」

石田は斯う云ひながら、氣輕ろに立ち上つて、お茶賣り男の所へ行つて、いくらか握らせながら、何か聞いて居る樣だつたが、間もなく浮かぬ顏をして歸つて來た。

「駄目だよ。あいつにも分らぬさうな。野雞なら、どんなのだつて、あいつ等が知らぬ筈はないからね。あいつら迄知らぬ所を見ると、やはり野雞ぢやないんだらう……」

「さうかい、いやに高慢ちきな女だつたネ……」

二人は暫く顏を見合して居たが、やがてどちらからとなく尻を上げてはかない探し物でもする樣に場内を一巡して見たが、もはやそれらしい女の影さへも發見する事は出來なかつた。

三

あの夜以來、僕は大世界へ行く機會がなかつた、その上毎日毎夜刺戟の强い時間を送つて居たので

忘れるともなく、其の夜の娘達の事は記憶から薄らいで行つた。

其の間僕の生活にも、色々の影がさして來た。愉快なのも、不愉快なのも……所がだん〳〵不愉快な影の方が濃くなつて來た。其處で僕はフランス・タウンの或る家の二階を借りて、引き移る事にした。

ゴミ〳〵した虹口から、廣々とした佛租界へ來た、僕の生活は極めて明かなものになつた。空氣の清く冷い、道路の廣くて美しい、西洋人が自分の町の樣にして散歩してゐる此處で送る朝夕は、今迄の虹口で引つかぶつた、塵埃を、洗ひ流してくれるに充分であつた。

其の頃、例の石田はある事情の爲めに、上海を去つてフランスへ行つて仕舞つて居た。それでも彼は出發間際に、北村と云ふ青年を僕の助手として、連れて來てくれた。で、それ以後は、今迄僕と石田との世界であつたのが、僕と北村との世界に、クルリと廻轉したのであつた。

北村君は流石に、石田が撰んで、僕の所へ寄越してくれた丈に、僕にとつては非常に適當な助手だつた。酔つぱらふと時々柔道三段の腕前を振ふ事もあるが、これは永年（と云つても、彼はまだ青年だが）奥地で、苦力を使つて居た時代の遺物だと思はれる。

僕は北村君に仕事も手傳つて貰つたが、或はそれ以上、色々の歓楽郷へ引っ張つて行かれた。然しそれを一々書き立てゝ居ては限りがなさゝうだから、まあ僕が上海の歓楽郷については、相當以上に通じてゐると云ふ事を、知つて置いて戴く丈にして置かう。そして、それ等の委しい報告は、又の日に譲つて、今は北村君と共に此のお話の本題に必要な、も一人の男を御紹介申し上げる光榮を得たいと思ふ。

その人は陽さんと云つて、日本の帝大を卒業した小壯學者であつたが、或る事件の爲に、上海の某大學から追ひ出されて目下社會學の研究に没頭してゐる、日本好きの青年紳士であつた。

僕と陽さんとの關係は、僕が或る支那の本屋と、出版の事で交渉した時、陽さんが先方の依頼を受けて、僕に會見を申し込んで來た時から始まる。それ以來、すつかり氣が合つたと見えて、一日々々と親交を重ねて行つたのである。

これで此の物語の爲に必要な二人の主要人物の紹介も、簡單に片づいたから、又僕自身の行動をお

話する事にしやう。さうしないと、いつまでたつても大世界の貴女の正體が分らない。

四

虹口からこちらへ來て、もう二ケ月程になる。フレンチ・パークのプラターナスの葉が木蔭の日溜りに吹きたまつて、其處で支那人のアマ達が編物しながら、可愛いゝ西洋人の子供を遊ばして居る日が續く樣になつた。

或る晩風がないので、外套も着ずに、フラリと食後の散歩に出掛けた。霞飛路の大通りの美しい舗道の上に、散り溜つた街路樹の葉を、杖ではね飛しながら、コツ〳〵歩いて行つた。

晩飯のコーカサス料理のシャシリツクが、とてもうまかつたので、ロシヤ人のボーイに鼻歌口をきいて、チップをいつもよりハヅンだ位だから、今晩の散歩は當然愉快だつた。歩調はいつしかグングン延びて、知らぬ間に大世界の前まで來て仕舞つた。

エドアル路と西藏路との交點、大世界前の廣場には、ずらりとタクシーが並んで、コンミツション附の客引が、外國人と見るとうるさく寄つて來る。僕も嘗ては此處から紅口迄、一圓廿錢（廿錢が客引のコンミツション）で乘つた覺えもあるが、今散歩の僕には不用の代物だ。不用々々を連發して擧退する。

賣藥と煙草の電氣廣告が、大世界から洩れて來る樂の音に、はやし立てられた樣に、騷々しく明滅する。見物人と野雜とか、ボツ〳〵入場し始めたと見えて入口の所が雜踏し出した。別に行先の當もない僕はそれ等の男や女が、水の樣に吸ひ込まれて行く有樣に引き入れられて、フト入場して見る氣になつた。三十錢の入場料を拂つて、場内へ這入ると、忽ち支那の歡樂場には特有な、（ことに大世界に於ては、それが濃厚だ）陰鬱な喧騷をガン〳〵と頭顱に感じると、何とはなく二ケ月前に石田と初めて來た夜の事が思ひ出された。

なる程思ひ返して見ると、僕がこの佛祖界へ來てから、もう二ケ月餘になり、毎晩の散歩の傳手に、よく大世界の表を通つた事はあつたが、どうしたものか、別に入場して見る氣にならなかつたのが、今晩に限つて、不意と這入つて見る氣になつたのだから、吾ながら一寸變だつた。して見ると甚だ迷

信めくが、此の場内に何かいゝ事がありはしまいか？……と、一ぱしのロマンチストになつた氣で、獨り笑を洩して仕舞つた。

とに角僕は、既に諸君の御察しの通り、場内へ這入つて、純粹の上海娘の薫香つて奴を、嗅いだ瞬間、まざまざと、例の紅衣と青衣との二人娘を思ひ出して居たのだ。特にあの姉の方の皮肉な微笑を浮べた口唇と人を人とも思はぬ傲慢な態度が、はつきりと頭の中に浮んで來た。笑はれるかもしれない、が僕はヒョッとしたら、會へるんじやないかと……まさか眞劍には思ひもしなかつたが……まあ此の良夜のいゝ氣持を一層浪漫的にする爲に、そんな事まで考へながら、ブラ〳〵場内を巡り始めた。

久しぶりで來たせいか、見るもの聞くものが、皆野生的な新奇さを以て、僕の視聽を引きつけた。勿論まだ其の時の僕には、舞臺でやつてる音樂も、科白も、何が何だかよくは分らなかつたが、それでも何んとなく親しめる樣な氣分になつて居たのは事實だつた。

僕は表二階を一と廻りして、下へ降り、中庭を横切つて、一番奥の大舞臺を覗かうとしたが、とても滿員なのでやめて、其の隣の喜劇をやつてる方へ足を進めた。此處も滿員なので、場外の扉に凭れてキッヤ〳〵笑ひながら、男女が雜然と入り交つて、すし詰めになつて居る見物席を、何氣なく見渡した。

ト……。大袈裟の樣だが、實際僕は目がクラ〳〵となつて、顳顬がズキン〳〵とした。僕の立つて居る所から二間許り右手の見物席の中に、あの赤衣の娘が只一人、例の如くツンとすまし返つて舞臺を見て居るではないか！　ホラ、小説家おきまりの定石を打つたな、と諸君は輕くさばいて仕舞ひ度いかも知れぬが、それはいけない。僕の右手二間の所に、彼女が居た事は、斷然事實なのだ。一體上海つて所には、小説家の空想なんか、蹴飛ばして仕舞ふ樣な、素晴しい偶然の事實が、いくらでも轉がつて居るのだ。

さあそれからの僕は、もう舞臺所ではない。全部の興味を赤衣の娘に傾倒して仕舞つた。だが、此の前石田が、あの娘は決して野雀ではないと斷定した言葉が、頭の底にこびりついて居る。そして野雀でもない娘に、異邦人の僕がどんな交渉を持ち得やう。ましてやあの傲慢さに對して、僕の存在が何程の事であらう……甚だ心細く見つともない話だが、僕の赤衣の娘に對する其の時の心持は、右の

如く極端に消極的な弱氣であつて、あの娘とアヴァンチュールを作つて見度いなぞと云ふ勇敢な考へなんかは決して持たなかつた樣に思はれる。

只僕は禁園の花をひそかに觀賞する丈で、滿足して置くつもりだつた。それで、僕は行けば行かれたが、敢て娘の側へ、割り込まうともせず、そのまゝの角度から、娘の動作を觀察し始めた。其の內に芝居が一幕終つて、見物席が騷然と動搖し出した時、赤衣の娘がヒヨイとこちらを向いた。以下假定法による表現。

一、彼女は僕の存在を認めた樣だ。或は二ケ月以前のあの男であつたと云ふ事まで、認めたかも知れない。

二、高慢な彼女の目がうるんで、白い頰が薄桃色になつた樣だ。

三、それから、彼女は時々こちらを見た樣に思はれる。

オヽ・モン・デイユー!!!

……

それ以來、僕の夜の散步は、完全に大世界へ向つて集中された。來る夜も〳〵、僕の姿は大世界の喧騷の中に現はれた。そしていつも彼の女の姿を發見する事が出來ず、消然と霞飛路の大通を歸つて來る……果敢なき散步となつて仕舞つたのである。

五

十一月の末になつて、空つ風がピユー〳〵吹く時は、人氣(ひとけ)の薄い佛租界は、ひとしほ身にしみるが、まだ〳〵外套さへつければ、散步に好適な日が多かつた。僕は今夜も說明し難い複雜な氣分を抱いて、大世界の入口をくゞつた。僕は別に何を見ると云ふ事なく、心の裡で、彼女の正體について、取りとめなく考へながら、人波の動くまゝに、舞臺から舞臺へと移動して行つた。

どう考へても、彼女の僕に對する態度は不可解だ。相變らず僕の存在を見下(みくだ)す樣子は變へないが、いつでも僕が彼女の背後に居る事は十分感じて居る樣だ。そして僕の烈しい眼の言葉を、頰を赤くしながら、受け入れて居るとさへ思はれる事もある……僕はいゝ氣になり過ぎて居るかも知れない……

然しあの娘は確かに……僕はいつしか一番奥の喜劇の舞臺まで來て仕舞つて居た。

僕は習慣的に、右側の特別席を見た。すると、居た！　居た事は僕にとつて、此の上もない幸福だが、その次には又如何ともなし難い、無能な、自劣感い眺み合ひの數十分が來るのかと思ふと、うんざりせざるを得なかつた。

僕は全く、此の道にかけては、能なし猿の標本にしか過ぎなかつた。自分から引いた一線を、どうしても跨ぎ越す事が出來なかつた。彼女の横の席が、わざとした樣に空いて居た。其の席へ僕が行つたつて、誰も何んとも云ふ筈はないのだ。絶好のチャンスが眼前に轉がつて居る。それを一寸拾へばいゝのだ……所が……諸君はさぞ歯がゆく思つてくれるだらうが、全く僕自身だつて、出來る事なら、ろくでなしの臆病心を、此の足で蹴飛ばしてやり度い位には思つて居るのだが、結局はどうにもならず、泥棒猫が、肴を覗ふ樣に、只マヂ〳〵見て居るより、氣の利いた眞似も出來なかつた。

數十分は無爲に過ぎたであらう。突如彼女はプイと立ち上つた。そして僕の面前をすれ〳〵に、さも輕蔑した樣な一瞥を投げつけながら、例の軽妙な歩調で、速足にサッ〳〵と歩き出した。僕は意氣地なく、其の後を追はねばならなかつた。

彼女は中庭の片隅で、向ふから來た三人の青年と愉快さうに立話をやり始めた。僕は無性に腹を立てゝ、唇を噛みしめながら、それでも廊下の影に身を凭せて、彼等の話のすむのを、ぢつと待つて居た。時々娘は僕の方を流し目に見ながら、小聲で話すと、三人の青年達はあから樣に、一種の敵意を見せて、僕の方を睨みつける。僕は耻しいやら、口惜しいやらと云つて思ひ切つて歸る事も得せず、所謂悶々の情つてやつに、せめさいなまれて、ひたすら彼等の話の早くすむのを祈つて居た。

其の内に、青年達は、彼女をどこかへ連れて行かうと、盛に勸めて居る樣だつた。所が娘は首を振りながら、何事か云つた。すると青年達は殘念さうな表情はしたが、それでもおとなしく、娘に左樣ならをして、すぐ横の舞臺の方へ行つて仕舞つた。其處で僕はホッとして、さてこれからどうするかと思て居ると、娘はチラッとこちらを見ながら、其のまゝ表の方へ出て行く樣子なので、僕もすぐ後を追つた。僕は足を早めて娘の背後三間許りの所で近づいた。神樣！　娘にハンカチでも落さして下さいまし！！　だが、娘は何も落さず、而も僕のついて來る事を充分知りながら、すん〳〵歩いて、

場外へ出て仕舞つた。そして今度はゆつたりした歩調で、大世界の外壁に沿ひながら、ブラリ〳〵と歩いて行く。僕が一足大股に踏み出して、「モシ」と一言口を切つたら、成るか成らぬかは知れないが、とにかくそれで夢の世界から、現實の世界へ這入る事が出來たのだが……だがと書いた以上は既にお分りである通り、又しても僕は此の好機を意氣地なくも攪み損つた。一町程靜かに、且つ無駄に歩かされた娘は、クルッとこちらを向いて立ち止つた。そして出來る限りの侮蔑を集めた眼で、怖い程僕を睨みつけて置いて、そこまでついて來た、自家用とおぼしき立派な自動車の中へ、ット乘り込んで仕舞つたのであつた。

六

僕の代理として、南京まで行つて貰つた北村君が、具合よく話を纏めて、丁度僕がこんなトラブルに引つかゝつて、フウ〳〵云つてる最中に歸つて來た。僕としては百萬の味方を得た心地だつた。早速僕は發端から、現在進行中までの事實をすつかり打ち明けて、さてどんなものだらうと相談をかけた。すると年こそ若いが、上海の野雞道にかけては、決して後れを取らぬ北村君は、僕の話を聞いて、意外な顏付をした。

「隨分御熱心ですネ。だが、何んでもないじやありませんか！」

と甚だ輕く取扱つて仕舞ふ。其處で僕は、其の女が北村君の思つてる樣な簡單な娘でない事、どう考へて見ても野雞とは思はれぬ事等を、詳細に說明を試みたが、北村君はどうしても自說を固執して動かない。

「何に、大丈夫。野雞ですよ。野雞ですともさ。大世界へはよくそんなのが來ますよ。とに角僕に委して置いて下さい。うまくやつて御覽に入れますよ。」

僕は斯うした北村君の言葉を、甚だ賴母しいとは思ひながらも、何んだか危つかしいと云ふ氣分をすつかり去る事が出來なかつた。

其の晩は寒い晩だつた。然しロシヤ料理店でウオトカを一瓶傾けた北村君は、非常に元氣で愉快さうだつた。僕は又、嬉しいとも心配とも何んとも云へぬ變な氣持で、然しかなりの期待は持ちながら、

北村君の南京秘話を聞かされながら歩いた。

此の頃では、僕と大世界とは、もうすつかりお馴染になつて居る。大世界中のどこへ行つたつて、僕を變な目で見る樣な人間は一人も居ない。今では、どの隅には、どの野雞の一團が居ると云ふ事まで、自然に判つて來た。そしてこれはと思ふ樣な、第一流の野雞達と一言二言位の冗談口が利ける樣になつた。マ早く言へば大世界通の僕にとつて、依然としての解き難き謎は、例の赤衣の娘の正體であつた。

僕は早速北村君を、彼女がいつも好んで見て居る、一番奥の喜劇の舞臺へ引つ張つて行つたが、生憎其處には居なかつたので、一寸不安になつた。それで二人は階下から階上へかけて、ブラブラ探し廻つたが、さて探すとなると、廣い場内の群集のこととて、仲々容易な仕事ではなかつた。其の内に北村君が斯うした探し物にそろ〳〵興味を失ひかけて來る。

「ネ、ホラあの椅子に居る、右から三番目のを御覽なさい。素敵じやありませんか？　あなたの所謂大世界の貴女つてやつが、どんなものか知りませんが、あれなんか先づ一流中の一流ですぜ。……何んとか話して見ませうか？」

僕も北村君の指示した女が、大したものであつた事は十分に認めた。卒直に素晴しいと嘆稱した。然し今の僕の頭は、赤衣の娘で一杯になつて居て、何者をも受け入れる丈の餘地がなかつた。

「ウン、あれやいゝよ。だがあまり支那人過ぎるネ。僕にやも少しエキゾウチツクな新鮮な美がほしいネ。マ、もう少し附き合つて探して見てくれ給へ。」

「ヘン、あなたの娘々（ニヤン〳〵）つて、どこまでいゝんですか？」

北村君は遠慮なく、こんな言葉をあびせかける。僕も内心ムッとしたが、見て驚くなと云つた自信があつたので、其のまゝ默り込んで又人波を拔けつ潜りつ、血眼になつて探し始めた。

所が肝腎の北村君の方は、ウオトカの醉が、いゝ加減に廻つて來たと見えて、頗る御氣嫌で、僕の事なんか忘れて仕舞つて、行く先々の娘達に、からかひながら、至る所で停電して仕舞ふ。僕はすつかり憂鬱になつた。そして猶も女達と巫山戯ちらして居る、北村君をうつちやらかして置いて、只一人外套の襟に顔を埋めながら、寒い夜風の吹きすさむ場外へ出て仕舞つたのである。

七

あの不愉快な晩の事から、僕と北村君との間に、あやふく深い溝が、堀られさうになつたが、都合よく其の翌日から、不意の仕事が出來て、一週間と云ふものは、二人とも共同して、其の仕事に沒頭したのと、北村君があつさり、あの夜の行動をあやまつてくれたので、又二人の仲は元の通りになる事が出來た。

其の間に月が改つて十二月になつた時、僕の仕事もかなり滿足な結果を得て片づいた。其處で當分は手足を延ばして、好きな事の出來る人間が、又二人出來上つたと云ふわけだ。今度は北村君も大變熱心になつてくれさうだし、仕事のうまく行つた元氣も手傳つて、今夜こそはと必勝を期して、颯爽と、又ぞろ二人で大世界へくり込んだのである。

僕は黑ソフトに、タキシードを一着に及び、薄皮の手袋、薄手のオーバーと云つた、まるでダンスにでも行きさうな服裝だつたが、北村君は地味な支那服を着込んで、すつかり上海人になりすまして居た。

十二月とは思へぬ暖い夜だつたので、場内へ這入ると、ムン〳〵して、とても外套は着て居れない。僕は服裝が目立ち過ぎるので、多少氣が引けたが、もう剛れ切つた場所なので、かまわず外套を脫いで仕舞つた。

所が、オヽ、何んと云ふ惠まれた晩であつたらう！　僕等が階上の左端にある、新派喜劇の前まで來た時、全く造作なく女を發見して仕舞つたのだ。然し今晩の彼女は、此の前の樣な眞赤な衣裝ではなく、眞黑な緞子の樣な地に、銀絲で唐草を縫ひ取りした、非常にノーブルなワンピース風の支那服を着て居た爲か、一層つけ入るすきのない樣な氣品を備へて居た。

彼女も素早く僕を見付けた樣だつた。そして連れて居る十二三の女の子に（これは僕と石田とが初めて彼女達を見た時の靑衣の娘ではない）何か囁きながら、丁度空いた居た、後から五列目の椅子に腰を下した。

僕はすぐ彼女の場所を北村君に敎へた。其處で北村君は初めて、所謂大世界の貴女の後姿を見たわ

けである。彼も女の服裝の上品さに一寸氣押された樣だつたが、すぐ僕の耳元で囁いた。

「すぐ行きませう。いゝ具合に隣が空いてますよ。先づ側へ行つてから、おもむろに切ッかけを作りませう。」

如何に臆病な僕でも、もう此の機會を取逃す事は出來なかつた。變に上はずつた取りすまし方で、思ひ切つて、彼女の隣へ腰を下して仕舞つた。全く以て、目をつぶつて下して仕舞つたのだ。彼女も此の僕のあまりにも急な攻勢に對しては驚いたらしい。あの高慢な白い顏に複雜な紅潮を現はして、モゾ〳〵と身動をした。確に彼女も動搖した事は、輕く觸れて居る身體の接觸からも感じられた。

すると、さあ大變な事が持ち上つた。僕と彼女とは、たちまち滿場の注視の的になつて仕舞つたのだ。舞臺なんかそつちのけにして、さも稀らしいものを見る樣な好奇的な、無數の兩眼が、雨の樣にふり注いでくる。それもさうだらう。滿員の見物の中でたつた一人タキシードなんかを着込んだ東洋人とも西洋人とも分らぬ樣な變つた男が、彼等の女王（多分さうだつたんだらう）の隣へ腰掛けたんだから、これより目立つ見物は無かつたに違ひない。

僕は完全に混亂して仕舞つた。此の善意とも惡意とも解し兼ねる、無數の視線に挾み打ちされては、たまつたものでない。僕は何もかも打つちやつて、此の場から逃げ出したくなつた。と云つて折角此處まで來て、どうしてムザ〳〵彼女の側が離れられやう。僕は北村君を唯一の助け舟として、見らば見ろと觀念の目を閉ぢて仕舞つたのである。ところが彼女の方でも、思ひがけぬ此の場の有樣には、すつかり參つたらしい。顏中眞赤に染めながら、なす術を知らぬ樣に、呆然空虛な舞臺を見詰めるのみだつた。

後から北村君に聞いたのだが、あの時は全く變な氣分が、場内を支配して居たさうだ。僕等二人がまるで作りつけの人形の樣に、堅くなつて居るので、北村君としても、どうして切つかけをつけていゝのか、分らなかつたのださうな。それに、あんなに皆から、見られちや、如何に圖々しい人間だつて、とても口を利く勇氣が出るもんじやないと云ふ話だつた。

とに角、僕にとつては、一生程にも永く思へた十數分が過ぎた時、既に自分を取戻したらしい彼女が、此の張り切つた緊張を破つて、例のすましした態度を、一層取りすまして、靜かに而も敏捷に、自

分の席を立つて行つた。そこで僕等も救はれた樣に、ホッと息をついで、すぐ女の後を追つたのは勿論であつた。するとよく訓練された支那の民衆は、今あつた事なんかはケロリと忘れて、再び熱心に舞臺の方へ注意を向けてくれたので、僕達は以後何んの氣まづい思もせず、女の後をつける事が出來たのである。

彼女は二階の降り口の所で、連れの小娘と別れて仕舞つた。そしてやゝ急ぎ足の歩調で表口の方へ出て行く樣であつた。前庭と出口との間は、十間程小暗ひ廊下になつて居る。其の廊下の暗さを利用しなくては、到底彼女に話しかける機會はないのである。僕達は思ひ切つて早足で、彼女に追ひついた。幸の事廊下には人通りが途絶えて居た。北村君は十分注意しながら、淑女に云ふ通りの丁寧さを以て、一寸其處らまで、お附合ひ願へまいでしやうかと、口を切つた。そして猶、どんな御要求でも承知致しますと附け加へた。……が……僕と北村君の中間に挾まれた彼女は、何も云はなかつた。一言も云はなかつた。と云つて、僕達に憎惡の瞳を投げつけるでもなかつた。只顏を眞赤にして立ちつくして居る許りであつた、僕は周章てた。次の言葉を探さうと努力したが、うまく頭へ浮んで來ない。北村君も見當が外れたらしい。野雞だつたら、何んとか云ひさうなものだ。良家の令孃だつたら怒りさうなものだ。どちらにしても、何んとか說きつけやうと覺悟して居たのだが、無言の前には策のほどこしやうがない。彼女はあくまで沈默してゐる。三すくみの狀態が五十秒、六十秒……一分半も續いたか？　表から入場者がドヤ〳〵と這入つて來た。通りすがりに僕等を見て行くに違ひない。早く何んとか片がつけッと、又ぞろ僕はこんな變な具合になつた事を、後悔し始めたのであつたが、その思ひは僕等より、彼女の方が餘計だつたのだらう。クルリと向ふをむいて、追はれる樣に、スッ〳〵と表の方へ出て行つて仕舞つた。だが其の時僕の眼底に殘つた彼女の顏は、怒りでも、恥らひでもない。確にそれは困惑した時の顏に違ひなかつた。

八

「それや勿論野雞でしやう。大丈夫だから僕に委して置きなさい」

「だつて、北村君も、初めはそう云つてたんだよ。陽さん、確かネ？　今度失敗したら、いくら僕が

厚ケ間しくても、二度と大世界へ顔出し出來んからね」

「ハハヽヽヽ、それやそうでしやう。君の樣に變つた男が、毎晩其の女の尻を、つけ廻して居ては、大世界の連中は、察しがいゝですからネ。」

「その通りだよ。もう札場なんか、すつかり僕の顔を知つてるから僕が行くと、いつも變にニヤ〳〵して挨拶するんだからネ。それもいゝが、此の頃は野雞の奴がうるさくごたつきにくるから閉口するよ。」

「それや君が、一人の其の大世界の貴女とか云ふのに有頂天になつて、其他の有名なる諸嬢に、甚だ冷淡なので、大に反感を買つてるのでしやう。」

「ン、そんな事かも知れんが……だがネ陽さん！　僕は此の頃では、あの女をどうするッて事より、一時間でもいゝから、二人で話がして見たいつて氣になつてるよ。」

「馬鹿に弱氣になつたものですネ。とに角今晩行つて見ませう。なるかならぬかは其の時の事として、所で晩飯はどこかで御馳走になりませうかネ。」

……

さて其の晩行つたか？

勿論！

成否は？

マ、そんなに急ぎ給ふな。これから委細お話するが、あまり同じ樣な大世界での出來事をくだ〳〵書いて居ては、當人の僕はいゝとしても、他人の讀者諸氏はたまるまい。其處で、當夜、陽さんが彼女に對して如何なる交渉を試みたかと云ふ事を、出來る丈簡潔に、報告文式のスタイルでお話するとしやう。

……

其の晩僕と陽さんとは、都合よく彼女を發見した。僕は勿論直に陽さんが、プロポーズするものと思ひ込んで居た所が、陽さんが又躊躇し始めた。北村君の場合と同樣だ。要するに打ち込む隙がないのだ。全く不可思議な女だ。

所が其の晩、彼女は甚だ奇妙な行動を採つた。と云ふのは、いつも僕一人の場合には、何かしら誘ひの隙と云つた様な態度を示す事がある。それは臆病さうにウインクするとか、羞しさうに頬を染めるとか、自劣沐さうに舌打をするとか、色々の仕草で表現されて居たが……然し僕としては、それが本當に僕の話かけるのを待つて居るのか、からかつてゐるのか判斷がつかないので、いつも其の好機を、むざ〳〵逸してゐる様な次第であつた。然るに其の夜は、僕が支那人と一緒に來たのを見ると、こちらに呼びかける隙も與へず、さつ〳〵と出て行つて仕舞たのである。

僕と陽さんとは、呆然と顔を見合すより仕方がなかつた。僕が氣拔けすれば、陽さんは狐につまれた様な顔をしてゐる。二人とも話一ッせずに中庭のベンチに腰を下して、沈默の行に入つて仕舞つた。二人とも今晩こそはと意氣込んで來た出鼻を、物の見事にへし折られたのでへこたれ方も大きかつたのであらう。

かくする事二三十分にもなつたか、と、又も意外な事が持ち上つた。それはすつかり衣裝を着換へた彼女が、婆さんの女中を連れて、再び僕等の眼前へ現はれたのである。そして、僕達がそれを認めた事を知ると、婆さん丈を殘して置いて、自分はふり向きもせず、三度場外へ出て行つて仕舞つたのであつた。

此の意外な行動を何んと見たか、陽さんは僕の肩をポンと叩いて祝福した。陽さんに云はすれば、彼女のあゝした態度は、こちらの申出をアクセプトした證據だと云ふのである。

それから事は順調に進んだ。陽さんは、くだんの女中と、心置なく交渉を開始した。支那人である所の陽さんは、短刀直入的に、のつけから、ハウ、マッチを切り出した。所が女中の答が又意外だつた。「金の事なんかは、どうでもよろしい。あの方に會ひ度いのなら、兎に角家までいらつしやい」……これで僕達は又もや度膽を拔かれたのであつた。さてこれからが、愈々肝腎な所だ。僕はもつと丁寧に話を進めた方が本當だらう。

……

「そんな、金の事なんか、いくらだつていゝじやないかッ！」

と、陽さんが猶ぐず〳〵云ふのを、一喝した位だから、其の時の僕の滿悅は、諸君の御想像にあま

るだらう。

其處で女中と、僕達二人は別々に、大世界を出た。僕は此の前見た、彼女の素晴しい自動車を期待した。それから、部厚にカーテンをかけた温い婦人室を豫期した。そして私の申し分なく浮き立つて居る心は、魅力の塊の樣な、彼女のパヂャマ姿まで想像して居たのだが……

婆さんは外へ出ると、すぐ手を上げて車を呼んだ。すると黄包車(ワンポッ)が二十臺も、ワラ〳〵と寄つて來た。彼等には斯うしたお客が一番なのだ。然し婆さんは素早く三臺の車を撰んで、僕等を乘せ、自分も乘つた。僕はロールスロイスの代りに素敵に穢い黄包車に乘つたので、今迄の空想は忽ち霧散したが、それでも僕には、彼女が單なる野雞とは、どうしても信じられなかつた。

其の内に僕達の車は、エドアル路から、敏體尼蔭路へ曲つたが、すぐ小道へ這入つて、右へ折れた。そして一軒の不潔な居酒屋の前で止つたのである。

以前の僕なら此の不氣味な、物凄い居酒屋の軒は潛れさうもないが、今では相當上海馴れがして、大抵の事には驚かない所へ以て來て、今晩の成功で有頂天になつて居るのだから、安易な氣持ちで、中へ這入つて行く事が出來た。

數人の穢い支那人が、何か喰べながら、胡散臭い顏をして、ヂロ〳〵見るのをかまはず、婆さんについて、此の土間を通り抜けると、居酒屋の裏路地に出て仕舞つた。此の裏路地を横切つて、又一軒の薄暗い家へ這入つたのだが、何分此處らは、同じ樣な家がゴミ〳〵とあるのだから、最初の者には、どれが目的の家やらとても分りさうもなかつた。

家の中へ入ると、突然目の前へ、鼻を突く樣な、狹い險しい階段が飛び出した。僕達は此の階段をガタ〳〵昇り切ると、眞暗な廊下へ出た。二階には部屋の數も相等あると見えて、時々どこからともなく男女の笑ひ聲や、麻雀の牌の音がパチ〳〵と聞えて來る。僕達は相變らず暗い廊下を二曲り三曲りしたと思つた時、一ッの部屋の入口へ着いた。部屋へ這入つて見ると、凡そ十五六疊も敷ける廣さで、向つて左の隅に、例の四本柱の白布の幕をかけた蒔繪金ピカの支那式ベッドが、第一に目に入つた。陽さんと僕とは中央の卓について、婆さんと最後の交渉を開始する事になつたが、交渉の局に當るのは、陽さんと婆さんとだから、其の間に僕は部屋中を見廻すと、別に變つた所もない上海淫賣窟

の一室で、最初僕が空想して居た様な桃色の夢はどこにも見出せない。先づ藍黒檀の家具類……卓子、椅子、化粧臺、茶卓、衣裝ダンス、引延し肖像寫眞……と云つた様なものが、お定り通り配置してある。其の他何んの變つた所もなかつたが、此の部屋の奥に、も一ッ部屋がある様で、半開きになつたドアーの隙間からチラッと覗見した所によれば、甚だなまめかしい氣分が横溢して居る様で、あの部屋が目的のハレムに違ひないと一人で定めて仕舞つた。其の内に陽さんと婆さんとの間の交渉は、と云ふ所でヤット折り合ひがついた様だ。君一人だつたらはきつと取られると、陽さんが後で云つた位だから、此の相場は陽さんがウンと値切つたものだと思つて戴き度い。

此の時漸く我が大世界の貴女が、奥の間から出て來た。先程大世界で見たのとは違つた桃色の素晴しい衣裝を着て居た。普通はどんな高級な野雞でも、家へ歸ると、お客の前でもかまはず、すぐふだん着に着換へて、外出着はうや〳〵しく衣裝タンスへ仕舞ひ込むのが例になつて居るのだから、今此の女が家に居ても堂々と立派な衣裝をつけて居るのは、かなり意外に思はれる現象であつた。

代は勿論先き拂ひである。で、僕は彼女の前に置いた。すると女はさも輕蔑した様な態度で、其の中から一圓銀貨をつまみ上げて、ポンと婆さんの膝へ投げ出した。それからお茶と煙草とが出る。

僕は彼女の名前が知り度かつたので聞いて見たが、只老七（ローチー）と答へたのみで本名はどうしても明かさなかつた。やがてお料理が運ばれた。これは彼女達の間の習慣で、お客は必ず書ちかの夜食を奮發せねばならぬ事になつて居るのだ。

御馳走を喰べながら、陽さんが色々な事を彼女に質問したが、彼女は顔をポッと赤くしながら、極めて言葉寡なに、よく澄んだ聲で、ポッ〳〵返答する丈で、四馬路邊の野雞に見る様な猥雜さは微塵もなかつた。

此の點、僕は前から彼女の態度を見聞れて居るから、何んとも思はなかつたが、高をくゝつて居た陽さんには、一寸見當違ひの感があつた様だ。肩膝延して遊びに來たつもりで居たのが、何んだかお客に呼ばれて來た様な變な窮屈さを感じる程であつた。

僕は記念にすると云ふ氣もあつたらうが、とに角多少でも、此の場の空氣を安易にしやうと思つたので、彼女のスケッチが取り度いと云つて見たが、どうしてもそれを承知しなかつた。それのみか僕

に對しては、殆んど口を利かない。どうもあまり具合のいゝ狀態ではなさゝうだ。

其の內に十一時になつて仕舞つたので、皆が宿つて行けと勸めるのを振り切つて、待ち詫びて居るであらう所の愛妻の傍へ、陽さんは一人で歸つて行つた。

それから料理の皿が引かれ、皆の女達も引き下つて、僕等二人ぎりになると、何んと！　彼女の方からモデルになると云ひ出したではないか！　そして恥しさうに可愛いゝ口の利き方で、色々の事を喋り始めたではないか。平生示して居る樣な傲慢な態度は少しも見られない。單に無邪氣な稀らし物好きな、陽氣な小娘になつて仕舞たのである。

この急變には、僕もすつかり面喰つた。しかしそれからは、幸にも双方の意志を完全に通じ合ふ事が出來た。其處で僕は彼女に色々のポーズをして貰つて、三枚許りのスケッチを取つたが、其の中の一枚は、無理矢理彼女の爲に取り上げられた。彼女はその畫を、自分の寫眞の入れてあつた、小さな額の中へ入れ換へた。丁度其のとき時計が十二時を報じた。

九

其の翌日はどこへも出ず、終日陽さん、北村君、僕。三人で全くおとなしく暮して仕舞つた。と云つても陽さん、北村君の僕に對す質問は甚だ辛辣で、昨夜の一件を細大洩さず白狀しろ と詰め寄るのだ。

僕たるものニヤ〳〵笑ひながら、十一時から彼女の急變振りを、かなりの得意を交ぜて報告したのは勿論だつた。

「イヤ、そいつあ大變だな！　一寸信じられませんネ。あの女がそんな態度を取つたと云ふ事は、此の目で見なければ信じられませんよ。ヨタじやないですか？」

「だつて北村君！　僕の話が事實である事はホラ、此のスケッチが證明してるじやないか。最初彼女が絕對にスケッチする事を拒絕したのは、現在陽さんがチヤーンと知つてるからネ……どうです陽さん！」

「全く……。」

と陽さんは温い珈琲を、ゴックリ呑みながら云つた。

「全く、それは案外だネ。最も支那の女は人前では馬鹿に澄まして居るが、二人ぎりになると、すつかり打ちとける事は事實だが、あの女が一介の日本……」

「オイ〳〵紳士注意！」

「イヤ失敬！　實際あの女があなたに對してそれ程の好意をよせやうとは思ひがけなかつた。ことに後から來た支那人の客を、斷然追ひ返したなんて事は、北村君ではないが、一寸信じ切れませんネ……」

「ダメそれが本當とすると、確に愉快ですネ。驕る價値が十分ありますネ。明晩は勿論行くでしやうネ？　これから僕が出掛けて豫約して來ませう。」

北村君は氣輕に立ち上つて、帽子を掴むなり僕の返事も聞かずサッ〳〵と飛び出して行つた。

× × × × ×

此れが小説なら、此處で切つた方が餘韻もあつて本格だが、何分懸値なしの事實物語だから勝手な所で打切るわけにも行かないし、都合の惡い所を胡麻化すのも卑怯だから、とに角結末まで持つて行かう。もう少しだから御退屈樣だが、一緒に來て戴き度い。

さてと、僕達二人は北村君の氣早なのを笑ひながらも、大はしやぎで、彼女の返事を待ち受けて居た。僕としては勿論昨夜の待遇振りから見て、いゝ返事の來る事は確く信じ切つて居た。陽さんとてもさう思つて居たのだらう。明晩は一ツ「カールトン」へでも引つ張り出して、踊つて見やうなんかと、話して居る所へ殘念さうな顏をして北村君が歸つて來た。

彼女の返事は、母親の所へ行くから、明晩は駄目だと云つて、どうしても前金を受け取らなかつたのださうな。尤もこれは北村君が直接彼女に會つて聞いた返事ではなく、此の前の婆が云つたと云ふのだから、果して彼女の眞意であるかどうかよく分らなかつた。それにしても支那人の淫賣が、現在目の前に出された金貨を、未練氣もなく拒絶するとは、どうしても合點が行かぬと、北村君が首をかしけた。僕としても甚だ意外だつた。現にあの晩、明日も來るがお前の都合はどうだと聞いたら是非來

いと僕に答へて居る。それが一日置いた翌日には、もう手の裏返す様な返事をするとは、どう考へても不思議でならない。北村君が行つたのでひよつとしたら人間違ひをして居るのではあるまいか？と云つた様な事まで考へさせられる。然しどう考へたつて、あの夜の事を思ひ出したら、今日の彼女の拒絶は、絶對的に、僕を嫌ふ爲ではなく、外に何か止むを得ぬ事情があつたのだらうと思はざるを得ない。これは決して已惚ではないのである。

＋

僕及び北村君は五日間と云ふもの、居酒屋の路地裏の淫賣窟へ日參した。然しどうしても彼女に會ふ事が出來なかつた。いつ行つても留守だとか、旅行したとか云つて會はうとしない。嘘だと思つて强ゐて二階の部屋へ上つて見ても、實際彼女の姿は發見出來なかつた。其處に居る野雞達に聞いて見ても、一向に彼女の事を知らない。……夜は必ず大世界へ出掛けて、隅から隅まで探し廻つたが、やはり見つからぬ。たま〳〵例の婆さんを見かけたので、いくらか握らせて尋ねて見たが、結局知らぬと云ふ言葉しか引出す事が出來なかつた。

其の中に突然、どうしても北平へ行かねばならぬ用事が出來上つた。僕は其の旅行を延せる丈延した。そして懸命に彼女の行衛を探し歩いたが、依然として少しも手懸りがない。

とう〳〵明朝はどうしても出發せねばならぬと云ふギリ〳〵の日の夕方、最後の試に、僕、陽さん、北村君の三人で、惱み多き例の淫賣窟を訪れた。

然し矢張り駄目だつた。彼女は今晩も來て居ない三人は極めて憂鬱な顏をして此の家を出て、何んの當なしに、大世界の前まで、フラ〳〵やつて來ると、陽さんが突然大聲で叫んだ。

「アッ！　行く〳〵。向ふを御覽なさい。ホラ、黃包車（ワンポウ）で行くのは確かにあれですよ。」

僕はドキンとして立ち止つた。

「勿論追つかけやう。明日は北平行きだ。今晩はどうしたつて……」

と叫びながら、北村君は居合せた車を三臺引張つて來た。

美々しく着飾つた彼女の車を追ふ、三臺の黃包車！　十二月の夜風が熱した僕達の頰をヒュー〳〵

と削つて行く。

寸時にして僕等の車は彼女と並行になつた。第一に陽さんが呼びかけた。北村君が呼び掛けた。僕まで呼びかけた。

然し、彼女は美しい木偶人の様に沈默した。振り向かうともしない。四臺の車はずん〳〵大世界前の大通りをバンドの方へひた走つて行く。……

ト、彼女の車は江南大旅社の前で、ピタリと止まつた。僕達の車も止つた。其の時彼女は一寸と振り返つた。そして何んとも儚き嬰い不思議な微笑をチラリと投げかけたと思ふと、其のまゝ玄關正面の大階段をトン〳〵と輕やかに駆け上つて行つて仕舞つたのである。

完

昭和五年六月二十八日印刷
昭和五年七月廿日發行

愛の魔術

酒井潔著並に裝幀

超豪華版金拾圓（送料共）

私は此の本をさう澤山の人に向つて書いたのではありません。ごく少數の私同樣と云ふ人達と、私自身の爲に書いたものであります。

だから私は至極自由に思ふまゝに此の書を書くのであつて、あの讀者この讀者と無象苦勞をする必要はなるとすれば、つまり千人の私に向つて話かけるのであり、一人の私即ち著者さへ滿足させる事が出來れば、千人の私、即ち讀者をも滿足させる事が出來るからです。其の代り一寸でも自分を欺けば、つゝ抜けに千人の私に嘗顯して仕まひます。此の點流石呑氣な私も、大變な緊張を感じました。

全く自分の良心に忠實なる事はやつて見て實際困難だと云ふ事をしみ〳〵感じました。

或る種の滿足と自信とを持つて居ます。斯う斷言して置きますれば、別に角私は此の書に對して、私の讀者諸君には此書の價値を信用して賴けることゝ思ひます。

デカ〳〵と廣告しなくとも、然し念の爲、何故私がこんな奇物を書いたか、一言說明して置きませう。

人生の樂天的厭世主義者たる私の如きものにとつては、あらゆる社會的有用物は、退屈其の物に過ぎません。好奇心！これのみが私の生活に對する佛意を爆發させてくれる、一杯のカクテールであります。

私は此のカクテール・ア・ラ・マヂーを、退屈して居られる親愛なる讀者諸君にも御馳走したいが爲に、本書を著しました。これ以外に他意ありません。（著者）

（A）贅澤版 金五圓五十錢 書留廿七錢

竪七寸五分、横四寸六分、九ポインント約六百頁。本文每頁オーナメンント二度刷。用紙はこの本の爲に態々漉かせた特製品、總羊皮表紙九度押、フエリシアンロツプス原色版一枚、其他怪奇挿畫十頁、限定版番號入

（B）普通版 金參圓 書留廿七錢

用紙及裝幀材料を（A）版と異にす

愛の魔術目次大要

●第一部　第一章「愛の占術」▲西洋の占術　▲狐り占傳授▲指環の隱し言葉と禁厭　▲卷紙占法戀占ひ▲枕文庫の色道吉凶　▲今樣風俗好色談合柱　▲世志此錢占ひ……以下十數節

第二章「妖術」▲閨房忍術　▲夜中の秘密　▲隱身術　▲蠱術　▲妖僧　▲ネタブネスの魔法　▲西鶴の花鳥風月……以下十數節

第二部　第一章「咒詛」▲古代バビロンの咒文　▲印度の咒術　▲▲憎しみの咒詛　▲▲美男と巫女　▲▲未開人の咒法　▲▲ラテイラハスヤ　▲丑の咒法　▲支那の刻詛り　▲咒法　▲降神術　▲咒詛の常識　▲我が兒の戀に戀を取り戻す法　▲懷むを見て母の咒文……以下十數項

●第二章「護符」▲護符の起原▲裝飾品と護符　▲宗教傳說土俗學の研究と護符　▲招福の護符……以下十數節

●第三部　第一章「戀の秘法」▲愛に關する興味ある處方▲古代印度の秘法　▲古代支那の秘法　▲日本の秘法　▲南洋秘話……以下十數節

●第二章「美容法」▲青春保存法▲美顏術と美眼術　▲モロツコ女の美容法　▲アナンガランガの美容法　▲支那日本の美容法……以下數節

●第四部　第一章「花言葉」▲花の教用　▲花東通信　▲東洋、中世紀現代の花言葉を對比した稀らしき表　▲▲花時計の表……以下數節

第二章「愛に關する夢」▲羅馬娘の夢占　●西白き夢を見る處方▲「匂へる園」の夢判斷　▲愛の辭書　▲夢の分類　▲好色玉手箱……以下數節

第四部三章「寶石の魔術」十數節

第五部　第一章「紙鳶に關する魔法」▲親豪信都捨身の熱禱　▲星占術と子供の出生　▲變生男子の法　▲美しき子を得る法　▲生れ月による占法……以下數節

●同　第二章「花界俗信」▲花神界の迷信　▲未來の夫を照す鏡　▲めぐりを止める法　▲吉原畫法　▲不貞な男を呼寄す法　▲男の本心を知る法……以下數節

第六部　第一章「惡魔」▲鬼神論　▲日本の淫魔　▲玉房秘訣　▲古羅馬帝の暴行　▲聖女に惚れた惡魔　▲隱身された淫魔　▲惡魔のために起る交接不能　▲淫魔の形態……以下十數節

●同　第二章「黑彌撒」●同第三章「惡魔の夜宴」●同第四章「惡魔に對する虐刑」……各十數節

讀め!!

◆成らぬ戀に痩せて、深閨徒らに涙多き十八の處女よ。

◆戀よ！　戀よ！　戀を獵して歩く銀座街頭の若人達よ。

◆生活は退屈の連續なりと觀じて、人世を輕蔑する知識人よ。

◆叛き去りし男憎しと暗に瞋恚の呪をかくる執念の女よ。

尾崎久彌氏編著　酒井潔氏裝幀

怪奇草雙紙畫譜　全

四六版・極美本・箱入・定價金二圓五十錢・送料十二錢

箱根から此方は、お化は出ないと云はれたが、その癖お化は江戸人の最も歡迎したものである。大南北の芝居に現はれたお化以前、文化・文政の頃或はそれよりも古くから、血みどろなお化や幽靈は大衆藝術豫にヨミネンなどに取扱はれて大變な人氣を贏ち得た、實生活の上に異常を覓めて而もその實現の不可能を嘆ぜざるを得なかつたから江戸時代人は勢ひこれを空想の上に求めたのだつた。顏殿し戯嬲し切つた江戸時代人の心理的要求から生れたこれら異常なる怪奇美は、實に世界に於けるダス・グロテスクの代表的なるものであつて、古今東西を通じてグロテスク藝術が斯くの如く横行濶歩した例は正に空前であり絶後であらう。本書は即ちこの人間心理の究極をつきつめた草雙紙の怪奇的内容の考證と畫譜とを蒐ねた近來の好著であり、併せて普通の小說史と浮世繪史の缺を補ふに足るものである。

草雙紙（合卷）の約二百種、一千五百册以上の物から編者半歲の苦心の結果類聚したもの、畫家は北齋、初代重政、月麿、秀麿、春亭、春好、豐國、豐春、英泉、泉晃、國貞、國芳、國丸、國長、國直、國安、二代國貞、國周、芳藝等々、文化年間から幕末に至る浮世繪名家の挿繪は、殆ど一堂に集められた觀がある。

▲怪奇的妖美的圖版八十六圖（百七十四頁）
▲參考圖版三十一圖（三十一頁）
▲解說百二十五頁
▲附錄、底本列擧明細目錄十頁、内容類別索引八頁
▲口繪原色版、狂齋「四谷雜談」。同原色版「兒雷也豪傑譚」上下表紙極彩色大判折込一枚。
▲見返し馬琴稿本「木齋傳」の二圖（馬琴の自畫と自筆）

談奇群書發刊辭

元來私は一粒撰りの珍本を、出來る丈贅澤な裁幀で、一流の製本家の手にかけて、冊數も四五百位の限定版を出す事が好きでした。

所が此の道樂は甚だよくないと云ふ事だ。何故だッて聞いたら、白米十五キロが二圓か三圓で買へる時代に、一冊の本に五圓十圓出す馬鹿者（イヤ失敬）があるものかと云ふ答へだつた。

其處でつら〳〵熟慮した結果目下連續著述の『談奇』をやつてゐる傳手に安くていゝ本を作つて見度いと發願した。斯う考へたのは、白米十五キロ問題で、一本參つた所もあるが、必しもそれ許りではない。と云ふのは、私達の仲間内で、酒井と云ふ男は、高い材料を使つて、一かどの裝幀家を以て任じて居る手前安い材料を使つたつて、面白いのか貶したのか分らんが、兎に角私としても、一概然として立ち上つたと云ふわけである。

いものが出來ない筈はないッと、柄にもなく、云つて本を買ふ人間はないよ。白米十五キロが……待つた！　待ちすると、又皮肉な男が、今時裝幀が面白いと云ふ。そんなら內容も、うんと肩の凝らぬ面白い、大衆的で上品で、皮肉で……まづこれを讀んで面白くないと云ふ男は、餘程念の入つた低能兒（オツト又失敬）だと云ふ。

給へ！　もう十五キロ三圓の話は分つたよ。よろしい。

深刻で、

作つて御覽に入れやう。

と、云ふ素晴しい意氣込みで計企したのが卽ち、此の『談奇群書』であります。これは私一人でやるのであつて雜誌『談奇』の臨時增刊と見て貰つても構はない。今の所、年に三冊乃至四冊出し度いと思つて居ます。

で、この第一編が『巴里上海歡樂鄉案內』でありますが、讀んで件の如く、甚だ面白いものであります。そうではありませんかッ！

談奇群書續刊豫告！

第一編	『巴里上海歡樂鄉案內』	既刊
第二編	『エロエロ草紙』	七月下旬刊
第三編	『寢室の書』	九月下旬刊

總記　本書挿入の素書へ感想文でも何でもかまいませんから、一筆書いて御投函下さらば談奇人名簿へ載せて置きます。そして酒井氏の講演會とか出版紀念會とかのとき御招待いたし且つ折々珍奇な私信を酒井氏から差上げる筈です。（竹醉）

發行所　東京市本郷區丸山福山町十三
電話小石川二九二二振替東京二四三　竹醉書房